
世界を周るは転生者(チート) in リリカルなのは

チルノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を周るは転生者・ヒーリカルなのは

【Zコード】

Z6384Z

【作者名】

チルノ

【あらすじ】

けいおん！の世界から約600年、桜花君がリリカルな世界に転生、新たな力もこの600年で習得しチートにもほどがあるぞ！さて、悪役で動くことを決めた桜花君。どうなるんでしょう？

勝てるのかな？なのは達。

プロローグ（前書き）

「うーん、どうも、この本は、

プロローグ

どうも、俺の名前は風華 桜花 現役2年の高校生だぜ！

そんな俺は今、一つの問題に直面している。

それは、ここにはどーだーと言つコトだ

桜花「…………、確か俺は学校の帰りに……本屋によつて……立ち読みしてたら……！」

桜花「そつか！俺死んだー！」

？？「その通りです！」

？？「え～・・会話はめんどくさいんで一方的に喋りますよー。」

？？「貴方は死にまして・・それは私どものミス、貴方はまだ死ぬべき人ではないのです」

？？「なので私どもはお詫びとして転生をプレゼンントしようと思います」「ちょ・・話聞いて・・」

？？「申し遅れましたが私は、神様です。」

？？「それで転生の事ですが、貴方は生前、アニメや漫画が大層お好きだったようなので様々なアニメの世界に転生してもいいことにしました。」

神様「それで、アニメの世界と言つてもランダムに送られるのです

ぐに死んでしまつ可能性もあるわけです。」

神様「そこで、特典として貴方に二三能力を与える事にしました。」

神様「与えられる基本能力は、あらゆる力を操る能力です。」

神様「これは、貴方や貴方の周囲の物のあらゆる力を操る事ができます。」

神様「次に、身体能力の最強化。」

神様「これは、文字通り貴方の身体能力を他の追随を許さないほどに強化させます。」

神様「最後に・・・そうですね、可愛い娘に縁があるくらいの恩恵をあげます。」

神様「まあ?これは縁があるので、モテるわけじゃないんですけどねー。ざま みる!」

神様「まあ、こんなもんですかね。」

神様「んじゃあ、そろそろ行つて来て下さいーーあ、その世界で死ぬか物語を終えることで次の世界に赤ん坊になって転生、またはその世界によっては今の年齢で転生します。世界ごとに得た力や経験は引き継がれるので安心して下さい。容姿については転生ごとに変わりますんでよろしく」

神様「それじゃ、逝つてらっしゃい!」

パカツ・・・ヒュゞ

・・俺は思った、一方的すぎる神様にただ一言”死ね”と・・・

プロローグ（後書き）

はじめります。

プロローグ（前書き）

よろしくです。

プロローグ2

えへ、前回神様から転生生活を贈られた風華桜花です。

現在5つくらい世界をまたいできました。（作者の都合だよー）で、現在6つ目（読者の的には一つ目だよー）の世界魔法少女リリカルなのはの世界に送られてきました。

容姿は、9歳になっているようです。

世界をまたいでいく内に能力的にもチートに磨きがかかつてきました。ま、それは追々公開していくとして。

桜花「ん~・・家がない、ホテルに住もうにも金がない、野宿しうにも外寒い。」

びひじょり~

桜花「とりあえず現状確認だね」

えと・・この町は鳴海市で、此処は多分なのはの小さい時描かれてた公園だろ?・・

現在の所持品は・・今着てる服・・終わり!?・・ん?手紙?何々・・

桜花へ

私は神です。

貴方はリリカルなのはの世界では独り暮らしなっています。家の地図は入れておきました。

貴方の口座もあります。お金も入れてありますので自由にお使いください。

現在は原作三日前です。

P・S

一応ステータスで魔力EXランクを追加しておきました。
デバイスは・・・作れるでしょ？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

桜花「ふむ・・まあ、これだけしてくれればいいっしょ。んじゃ家
に帰りますか。」

で、今家に到着！

桜花「ん・・どうしようかな原作介入しようかな・・でもそろそろ
休みたい。」

今は原作に介入するか迷っている。

まあ、今同時進行でデバイス作つてんだけどね！
能力フル稼働させた最強デバイスだぜ！

桜花「ん、完成！」

桜花「まあ、巻き込まれた時にしか使わないけど。・・起動！」

『起動完了、マスター承認、風華桜花様。名前を付けてください。』

桜花「ん~・・イカロスでどうよ?」

『承認、現時点を持つて私の名前はイカロスです。よろしくお願ひしますマイマスター』

桜花「おう、早速だけど。この町全体に存在するロストロギア、ジユエルシードを探してくんない?」

イカロス『了解です。ちょっとお待ちを・・・完了! 21個のジユエルシードの場所をサーチしました。地図に出します』

すると、イカロスの上にデジタルな画面が現れた。鳴海市の地図の様だ点々と赤い点がある。

桜花「この赤いところにあんの?」

イカロス『はい、現在はまだ発動はしてないようですね。』

桜花「ん~どうじょうか? 集めてしつちやかめつちやかかきまわす?」

イカロス『いいんじやないでじょうか? 管理局が慌てふためくところを見るのは楽しそうです。』

「ひとつ結構なスピードで人格形成してんな。ま、いいか

桜花「んじや、今から集めに行こつか。」

イカロス『ア解』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

桜花「お、あつたあつた。これで何個目だっけ?」

イカロス『20個目ですね。あと1個はおそらく発掘者の淫獣が持つてるんですけど』

桜花「お前、原作知識持ってるだろ? 淫獣って『』
イカロス『マスターの知識は作成された時に能力と一緒に流れていますから。』

桜花「へー、んじゃ帰るか。」

イカロス『はい、それにしてもこれからどうするんですか?』

桜花「ん? 管理局とのはそれにフェイト陣にジュエルシードひつつかせて遊ぶ。」

イカロス『具体的にはどのよつこしてですか?』

桜花「ん? 一個ずつ発動させて、回収せんだけ。」

イカロス『ちょっとマスター、それって『』

桜花「ふふふ・・そう、完璧な悪役だぜ」

イカロス『まあ、マスターがその気になれば地球終わりですもんね。』

』

桜花「まあ、そうだよね。世界を終わらす程度の能力とか作れば一瞬だよね。やんないけど」

イカロス『私、今ほどマスターの味方側でよかつたと思いました。』

桜花「そう?まあ、これから楽しんでいいつか。」

もう夜になつている。

暗いし帰つて寝よう。原作まであと2日あるし。淫獣の念話が聞こえたらジュエルシーードを思念体で発動して原作開始だね。

それについても俺結構無敵すぎない?

プロローグ2（後書き）

次は主人公紹介です

主人公紹介（前書き）

チートすぎますね、はい

主人公紹介

- 主人公紹介

名前：風華 桜花

性別：男

容姿：そこそこカッコいい（上の中+つてとこ）

性格：かなりマイペース。ピンチでも焦つたりせず逆に笑う感じ常に余裕を持っている。

能力：あらゆる力を操る程度の能力。

この能力により、現在は

- ・地球を割れるほどの力

- ・光速に近いほどのスピード

- ・ビックバンでも傷つかない肉体

を身体能力底上げでGET。

さらに

- ・常に500手くらい先読みできる洞察力

- ・某IISの天才博士やジェイルスカリエットの数十倍もの頭脳

- ・誰をも魅了する歌唱力
- ・初対面でも5人に3人は一目惚れする魅力
- ・頭脳・才能底上げでGET
- 能力的には

- ・第一の世界　けいおん！で歌唱力や演奏力を世界一レベルで習得
 - ・第二の世界　めだかボックスで異常・過負荷を全て習得
 - ・第三の世界　とある魔術世界で全魔術・超能力・原石能力おまけで幻想殺しを習得
 - ・第四の世界　BLEACH世界で死神化、虚化、鬼道、フルブリングを習得
 - ・第五の世界　戯言シリーズ世界で曲弦糸、ナイフ使い、音使い、一喰い等習得
- つて感じ
- 魔力ランク：EX
 - 空戦ランク：EX
 - 陸戦ランク：EX

魔力量：EX

作った能力

- ・時を操る程度の能力
- ・重力を操る程度の能力

- ・見た技能を習得する程度の能力

- ・境界を操る程度の能力

- ・空を飛ぶ程度の能力

作った物

- ・色んな宝具（王の財宝も作り入れてある）

・スペルカード

・デバイス『イカロス』

・家の家具や調理道具

・デバイス

名前：イカロス

A.I搭載のインテリジェンスデバイス

機能

- ・地球全土を覆える探索機能

- ・管理局を一瞬で乗つ取れるハッキング機能

- ・桜花の全力に耐えられるコミッター機能（現在5つのコミッター稼働）

- ・桜花のサポート機能

性格：桜花と同じでマイペース。結構人を弄るのが好き

備考

桜花の能力によって作られた最高のデバイス。

よって、桜花の使用時にのみ桜花の作成した能力のみ自由に使用できる。

例をあげるなら、桜花のピンチ時に時を操り程度の能力で助けたりできると言つこと。

主人公紹介（後書き）

チートすきますねハイ！

後悔はしていない。無双はほじほじにしますゆえ・・

あ、第2～5までの世界もいざれ書きたいと思します。

第1は・・気が向いたら・・きっと・・

桜花君の介入スタート（前書き）

介入しました。

一応言うと作者はフェイト好きです。
ですが別になのはが嫌いなわけではありません。
弄るのに最適なキャラなだけです。

桜花君の介入スタート

「いつも、桜花君です！前回、原作介入を決め原作開始前にジュエルシードを全て回収すると言つ暴挙を犯しました！」

「んで、昨晩ついにあの淫獸からの念話が入りました。ははは！バカなことを！！」

桜花「おし、んじゃイカロスや。まずはジュエルシードについて考察してみようか。」

イカロス『はい？それはつまりゆうじことですか？』

桜花「うん、まず原作だとさ？生き物達の願いや魔力を流すと暴走と言つ形で発動したよね？」

イカロス『ああ、確かにそうですね』

桜花「でも、基本これは願いを叶えるつづ一用途で有つてのはずなんだよ。」

イカロス『はい？それは・・つまり？』

桜花「つまり、これは正しい順序で発動させねばちゃんと願いをかなえてくれるんだよ！」

イカロス『な・・なんだってー！』

桜花「こいつの正しい使い方は、正しい量の魔力を正しい順番で2

1個のジュエルシードに注入してこべーとなんだよ。』

イカロス『なんでそんなこと知ってるんですか?』

桜花「うん? 答えを知る程度の能力を作った。まあ、一回使用したら消えたけど。」

イカロス『うわ、ずるー』

桜花「まあ、置いとこで。ジュエルシードについては終わった。とりあえず正体を隠してジュエルシードをバラまくよー。」

イカロス『Yes - si!』

桜花「さて今晚、思念体化をせひなのはを襲わせよつか

桜花「この物語、面白おかしくかきまわしてやんよー。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「夜、なのは side~

今、私は昼間に助けたフレレットさんに呼ばれて動物病院にきたの
そしたらフレレットさんは喋りだし、黒い何かが襲ってきたの

なのね」「いや～～～～～～すねばいいの～～～？」

ユーノ「これをして僕の血つとおつにしてー。」

なのは「赤い・・宝石？」

ユーノ「僕に続けて唱えて！」

なのは「え？え？う・・うん！分かったの！」

もうビックリでもなれなの・・

（呪文割愛（呪文覚えてないんだよー））

カツ！！

なのは「ええへへへへへ？」

気づいたら、思い浮かべたとおりの格好になつてたの

ユーノ「す”い魔力だ・・！？来た！-！-！」

驚いてたら、黒いなにかが襲ってきた
思わず目をつむり衝撃に備えてたら。

? ? 「つまんね。もういいや戻れ。」

そんな声がして目をあけるとそこには私と同じ年くらいの男の子が
狐のお面をつけてそこに居たの
そして次の瞬間、黒い何かは綺麗な青い宝石になつてその子の手に
収まつた。

「なのは side out」

（桜花 side）

さて、見ていたんだが・・原作と違つてなんか弱い。あの悪魔・・
つまらん！！！

んで介入！

桜花「つまんね。もういいや戻れ。」

つってジュエルシードを回収。速攻で去る
その際にユーノの持つてるジュエルシードを超高速で回収し見える
ようにして去る。

ユーノ「…？なんで全てのジュエルシードを……？」

だが聞く耳もたない！グッバイ！！

桜花「ふははははは！これが欲しけりや奪いに来いやバーカ！！
！」

ちらりと隠れてる奴にも目を向ける。

ん？原作と違う点はかなりあるみたいだな・・
あんなところにフェイトとアルフがいやがる・・・

桜花「…イカロス、転移。フェイトん家」

イカロス『了解・・転移』

フュイトん家で待つとこますか。

・・・フュイト家・・・

桜花「さて・・そろそろ帰つてきてもよれやうなんだけどな・・ん
?来たか」

がちや・・・

フュイト「・・・ただいま」

アルフ「は～お腹空いたねえ！」

てく・・てく・・てく・・がちや

桜花「はうーーマイエンジルフュイトちゃん。初めまして間近で
みると一層可愛いねー！」

フュイト「ー?」

アルフ「あんた!ー?」

桜花「そつ身構えんなよ、ほうやっこ座れアルフ。あ、フュイトは
こひや」

とりあえずアルフは警戒しながらもソファに座る。でフュイトは俺の膝に座らせる。

フ ハ イ ツ 「 ? . . . ツ ! ! ? / / / /

アルフ「なんで、フェイトをそこに座らせるんだい！ー」

桜花「アルフよ、お前はフェイトを不細工とでも思ってるのか?」

アルフー そんなわけない!! フェイトは世界一 可愛い美少女だよ!

「桜花「だりう~つまつやうこい」とだ。」

「…………」
アルフ「そりか・・そういう」とか・・なら納得・・出来るかい!

「まあいこじやう。とりあえず落ち着きたれ。」

アルフ「む・・なんなんだい・・あんたは・・」

フエイト「え・・えと・・私このままなの?」――――

「 桜花 ふむ・むきゆう！ うんこの抱き心地は最高なり！」

どうあれすゞコイドを抱きしめる。こも最高!!

桜花「あら、真つ赤だね~」

「く 桜花」「んじゃ、話をしようつか。まずアルフとフロイドに囁いてお

フェイト「／＼・・な・・なに？」

アルフ「なんだい？ とりあえずフェイトから離れる」

桜花「断る。・・一つ、俺はお前たちが何の目的でジュエルシードを求めているか知っている。」

アルフフェイト「！？！」

桜花「一一つ、俺はジュエルシードを全て・・持つている」「ト

テーブルに偽ジュエルシードが全て入った瓶を置く。

フェイト「ツ・・それで、どうするんですか・・？」

桜花「・・・・・」

アルフ「どうなんだい・・！」

二人ともなんか敵意全開でこいつを見てるなあ・・ふむ

桜花「特に、なにもない！！」

がしゃああー！

桜花「なに転んでんだよアルフ。」

フェイト？俺が抱きしめてるから転ばないよ？

「アーティスト、あ、じゅうじゅう、何してます？」

「ん〜? 大好きなフェイトに会いに来たんだよ。」にこつ

フユイト「ツ！？／／／／／／／／／／

桜花「さてと・・よつ」

フェイトを座らせて俺は立ち上がり偽ジュークルシードを回収、そしてログアウト

桜花「さて・・んじゃ改めて。今田はアニメでやつたジユエルシード発動地点にジユエルシードを置いてきた。」

「桜花、『そんで、悪魔の初戦を見てフェイ特の家にお邪魔。』んで今帰つてきたと・・もう午前1時か・・寝よつ」

イカロス『では、あの処理は私がやつておきますね。』

桜花「ん、おねがい。明日からはとりあえず観戦して、予定としては管理局になのはと協力関係になればいいか。」

イカロス『ふむ、表では悪魔の友人として管理局と手を組み、裏ではお面装着敵役として暗躍と言うわけですね』

桜花「…………」

イカロス『寝ましたか・・・おやすみなさいマスター。』

』

イカロス『とりあえず、悪魔とフェイトさんのデバイスにメッセージを送りましょう。』

メッセージ内容

とりあえずジュエルシードを町にバラまいたから回収したけり
やしてみる白い悪魔（笑）・・・なのは宛て

——私のマスターがジュエルシードを町に配置したので回収をお願いします。マスターも貴方の目的が達成されるのを心待ちにしています。では御武運を・・・フェイト宛て

イカロス『ふWW・・ざまみる悪魔!』

悪魔じゃないの!!

イカロス『なんか・・今、電波が・・気のせいですか。』

□

桜花君の介入スタート（後書き）

次は、フェイントとなのはの勝負です。

桜花君の転入となのはの初封印（前書き）

桜花くんの性格がけいおん！と違いますがそれは、転生の結果です。
容姿と一緒に性格も変わりますね。
だって、何年も生きてたら性格だって歪むでしょ？

桜花君の転入となのはの初封印

はい、どうも、桜花君です。

前回、いろいろとお膳立てしました。具体的には原作を初っ端から
ブチ壊しました。

んで、日が明けて今日・・つまり、なのはのジュエルシード神社戦
の日の朝。

桜花「桜花君は、とりあえず学校に行くことにしましたよ」と

イカロス『マスター・・誰に言つてるんですか?』

桜花「こっちの話だ。にしても俺つて今9歳なんだよな・・仕方
ないか」

イカロス『では、やはり聖祥大へ?』

桜花「うん、転入するわ。とりあえず手続きは神さんの方でやつて
くれたみたいだし。」

今、俺の手には転入手続きの書類がある。

桜花「んじゃ、行きますか。」

・・・・・・・・・・・・

なのは視点

今日は、私のクラスに転入生がくる見たいです。

アリサ「どんな奴かしらね?例の転入生」

なのは「うへん・・でも、お友達になれるとこいなー」

すずか「やうだねー!」

といふな感じです。さかちやんとアリサちやんと話したら。

バンッ!!

つて音がして。

桜花「ちーす!!=河屋です!!」

・・・はつー思わず畠然としちゃったの
でもそれは皆おんなじみたいで全員あんぐりしているの。

桜花「うへむ・・インパクトがなかつたか・・面白くないなー・・
うん!」

桜花「悪い、やり直すわ。んじゃまたね!」

ピシャン!!

なのは「な・・なんだつたの?」

アリサ「インパクトならありますたわ・・」

すずか「もしかして今のが転入生君かな・・?」

正直、凄い子だなーと思いました。

• • • 10 分後 • •

・・ガラツ！

皆「ビクッ！？」

先生、え? ど・・どうしたの? 皆?」

「なんでもなしてす」

息ひつたりなの・・

先生「そ、ですか？ではHRを始めます。まずははじめに転入生を紹介します。」

四庫全書

先生「あ、あれ?どうしたの皆?嬉しくないの?」あわあわ

先生……ま、まあいいです。それじゃ入ってきて。

シン・

先生「あれ？おかしいわね・・・」てくてく

ガラツ・・キヨロキヨロ

先生「あれ？・・・どこに・・？」

先生がドアの外を探していると、いきなり

桜花「はい、ではH.Rの続きを行きましょう。まずは私の自己紹介からですね！」

つてさつきの子が教卓で流れるよつて工房を始めたの。

桜花「え～私の名前は、風華 桜花とあります。桜花君と呼びなさい！」

先生、皆「「「「いや！スルーしないで！！」」」

そして、さりげなく命令形なの・・

なのは「色んな意味で凄い子なの・・

「む！ そこの茶髪ツインテール！ ！」

なのは「ふえ！？な、なにかな！？」

桜花「いや、特になんでもない。」

なのは「ないの！？」「

桜花「それじゃ、質問タイム。残り5分しかないからちやちやつと進めようか。」「

なのは「無視しないで～！～」

つ・・疲れるー！」の子凄く疲れるのー！

女子A「好きな食べ物は？」

桜花「わたあめ」

なのは「可愛」ー！～？」

女子B「好きな教科は？」

桜花「闇の魔術に対する～」言わせないのー！～」

実技だ！

女子C「ど」から来たの？」

桜花「遠い異世界からー！」

女子D「好きな子はいるの？」

桜花「内緒」

女子E「じゃあ、このクラスでタイプなのは？」

桜花「ふむ・・・」すつ

はあ・・はあ・・はあ・・この子発言が突発的すぎるの・・ん？
桜花君？がクラスを見渡してる・・あ、眼があつた。

桜花「俺の好みはあそこの茶髪ツインテール、」

なのは「えー？えええー？」

桜花「の右斜め後ろあたりの金髪さんだな」

なのは「紛らわしいの……」

アリサ「そして私！？／／／／／」

桜花「ま！好きなわけではないがな……あくまで好みと言つ話だ
…つぬぼれるなよ金髪……！」

アリサ「アンタねええええええええ……私は金髪じゃなくてアリ
サ・バニングスって名前があんのよ……」

なのは「怒るとこはそこなのー？アリサちゃん……」

桜花「あ、時間だ。じゃあ、HRを終わりまーす。田直さん」「れ
い」

田直「きつーつ、れい、ちやくせき~」

なのは「なんでそんなに冷静に命令が出来るのー？」

こんなかんじで嵐の様なHRが終わった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

～昼休み～

桜花視点

桜花「いや～、うんとつても面白かったな～」

なのは「なんで、私のところに来るの・・」

桜花「ん? オマエは結構面白くこからね」

なのは「やうなの・・それと私の名前は高町なのはだよ。なのはって呼んで」

桜花「なのはねえ・・だが断る」

なのは「なんでえ!-?」

アリサ「アンタ達なに漫才してんのよ」

すずか「桜花君はおもしろいね。」

桜花「ははは、誰よりも面白い人生を過ごしますから!」

転生とか転生とか転生とか・・・

なのは「へー・・でも最初からぶつ飛びすぎなのー。」

アリサ「確かに、あのHRは凄かつたわ・・」

桜花「いやだつてよ? あのくらコインパクトあればとらあえず第一

印象は強烈なものになんだが。」

すずか「た、確かに強烈だつたけど。」

桜花「それにしてもだ、元のまよ

なのは「なのはだよーー。」

桜花「いや、話を聞くひいだのね

なのは「な・の・はーーー！」

桜花「いやのは・・お前は話じを聞けんのか？」

なのは「NA NO HAーーーーー。」

桜花「ここいつ面白くな?

アリサ「なのは壊れてんじゃないーーー。」

桜花「ま、いいじゃん? とりあえずその手に持つたお弁当は食べないのか? そりそり時間がなこぞ?」

すずか「あ、いけなこーはやく食べよつーアリサさんーなのはち
やん!」

桜花「俺の名前がないこといつせつなセ・・」

アリサ「ここのよ。アンタの名前なんくなぐてもー。」

桜花「だけど気にしない！それが俺のジャステイス！－」

「おやおや・・・暗くなつすぐてなのはさんべつたじい飯粒をつけて
るのは「もつ・・・どうもこーの・・・もぐもぐ・・・
ますよ。

「なのは、ほいじ飯粒ついてるか?」ひょいぱく

「んん? どうした? 顔が赤い···ああ、悪い恥ずかしかったか?」

なのは「ふえ・ええええ・ / / / / /」

桜花「結構純粹なんだな！」にこつ

アリサ「むぐつ！？」／／／／（こいつ、結構カッコいい・・）」

すずかーんん！！//（桜花君の笑顔・・・すごい！）」

なんやかんやで、フラグを建てる桜花くんなのだつた。

放課後

「さて・・そろそろなのはとユーノが来るこころかな？」

カツ！

イカロス『発動しましたね。ジュエルシード』

桜花「うん。ん？あ、来たよなの・・悪魔さんが『

なのは視点

なのは「悪魔じやないもん！！」

ユーノ「ど、どうしたのなのは？」

なのは「いや、なんか悪魔つて言われた気がして・・なんでもない
の！」

ユーノ「そ、そつ？・・・・・みてなのは！・あれ！」

なのは「えー？何あれ！？」

ユーノ「生物を介して発動してる！本体がある分強いよ！」

犬？「ぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐい
ぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐい

ユーノ「なのは・早く変身を！――」

なのは「えー？ど、どうやつて？」

ユーノ「呪文！昨日教えた呪文を唱えて！」

なのは「う、うん……って覚えてないよあんな長いの！」

ユーノ「えええ！？・・仕方ない！もつ一度言ひから続けて…」

なのは「分かつたの！」

犬？「がああああああああ…！」ぱつ

なのは「わやああああ…！」

レイジングハート『Set up!』

カツ！

レイジングハート『Protection』

(以下レイハ、そんで日本語)

がきいいん！…！

なのは「う・・うん？あ、変身出来る！レイジングハートありが
とう…！」

レイハ『いえ、なんてことありません。』

犬？「がああああ…！」

ユーノ「なのはーはやく封印を…」

なのは「う、うん！リリカル！マジカル！ジューエルシード…封印…」

犬？「が・・がああ・・うひつ・・・」ぱたつ

なのは「・・・ふつ。やつたねユーノくん！」

ユーノ「うん、お疲れ様！なのは」

なのは「でも、この宝石どうすればいいの？」

ユーノ「レイジングハートで触れて。そうすれば勝手にしまわれるから」

ぽん。きゅいん！

なのは「これでいいの？」

ユーノ「うん、じゃあ帰ろうなのは。」

なのは「うんー。」

桜花視点

桜花「うん・・・どう・イカロス？」

イカロス『はい、ばつちり高画質で映像に残しましたー。』

桜花「将来、見せたらどうなるか楽しみだねー。」

イカロス『マスターも人が悪いww』

桜花「そしたら頼んでも無いのに高画質で撮ったお前もなw」

桜花「じゃあ、帰ろっか

イカロス『了解です。』

桜花君の転入となのはの初封印（後書き）

桜花君は楽しむことしか考えていません。
原作をばっちり知ってるのにね！

桜花君のなのはの初戦闘介入（前書き）

なんか戦闘描写がおかしい！！
文才が欲しいよ！サンタさ

ん！！！

桜花君のなのはの初戦闘介入

桜花視点

どうも、桜花君です。

転校してきてから数日。なのは達とも仲が良くなり、一緒にお風呂を食べるほどになりました。

で、今現在も「飯中」であります。

桜花「え？ すずかん家？」

アリサ「そう、今日行くからアンタも行く？」

すずか「桜花君はなにか予定があるのかな？」

桜花「ん～別にないな。」

なのは「じゃあ、行こうよ。」

桜花「ははは、だが断る……。」

なのは「なんでえ！？」

桜花「今日は家に帰つたらパソコン眺めて一ヤ一ヤしながら過いです
んだ！」

アリサ「それはただの一データよ。」

桜花「貴様！――トの何が悪いと申つんだ！」

アリサ「働くだけで周りに迷惑をかける所よ！！」

桜花「ま、冗談は置いといて。すずかん家知らないんだけど？」

すずか「あ、じゃあ迎えに行くよ~」

アリサ「無視すんな————！！！」

なのは「やつぱり、疲れるの・・・」

はは、なのはそれくらいで疲れてたらこの先やつてけないぜ？

桜花家

桜花「さて、今日はすずかの家に行くことになつたよ。」

桜花「うん、悪魔が衝突するな。」

イカロス『ではどうおつもう』です?』

「ん？ 割り込んでどうも隣どす」

イカロス『マスター、鬼畜ですね！』

桜花「大丈夫！本人たちの感覚じやいつのまにか墜ちてる感じだか
ら」

イカロス『ちよ、強すぎマスター』

桜花「ん？ 来たかな？」

ひんぽーん！

桜花「はーい、今開けますよー」がちゃ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（車内）

桜花「でだ、なのはよ。」

なのは「なにがでなのか分からぬけど・・・なに？」

桜花「あんさんの兄ちゃんがうちんことヤラシイ眼で見るんやけど
・そういう趣味の人なん？」

なのは「いきなり関西弁！？ つて・・・ええ！？ お兄ちゃんー・そつい
う人だつたの！？」

恭也「ち、違うぞーなのは！誤解だ！」

桜花「またまた～見てたんはほんまやん…」

恭也「確かに君の事を見ていたが「やっぱつけつなのーお兄ちゃん！」だから誤解だなのは…！」

桜花「やっぱこの兄妹まじ面白い」

恭也「く…調子が狂う…おこ君ーなのに手を出したら承知しないからな…」

桜花「なんや、なのはなんぞ相手せんと、僕だけを見りゆつとかいな？」

恭也「なつ…？そんなわけ「お兄ちゃん…」気持ち悪い…」「…」

桜花「なんだ、ただのシステムか」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「すずか邸」

桜花「いや～おつきにな～」

すずか「やつ? そんなことないよ。それにしても…」「ちり

恭也「…」ズーン

すずか「ねえ、桜花君…恭也さんは…「すずか、見ちゃダメ…」

あーゆーのはせりともなれこー」・「はる

なのは「ねえ、桜花君。さつきのお兄ちゃんの事なんだけど・・・」

「なんだ、あれは冗談だぞ？だから安心しろ。」

なのは「ほつ・・よかつたの・・割と本氣で」

恭也「…・・・はつ、俺はなにを・・」

「入るうか？」
桜花一
んじや、システムも起きたことだし。

すすか_あ、うん、ついでね

室内

桜花「おお～！」がすずかの部屋か？」

すずか「いや、JRAはただのトラスだよ。広いからね」

桜花「そうか、それはそれとして俺に群がる猫達をどうにかしてく
れないか?」

桜花「おー、よしそし。なになに?へー俺からいい匂いがする?へ

「俺にはよくわからないけどな？」

猫「いや～

桜花「ほほう、お前の名前はハルというのか、良い名前だな。ん？
そうか主人につけてもらつたのか。よかつたな」

なのは「猫と話してゐるの・・・」

すずか「名前もあつてゐし・・私が付けたのも当たつてゐる・・

なのはすずか「（桜花君つて・・何者？）」「

ま、そんなこんなでお茶タイム。

途中でアリサも加わり、賑やかになった。でアリサとなのはをから
かつてたら、空氣だつた淫獸ユーノとなのはが何かに気づいたよう
で、原作通り森へ入つてつた。

アリサ「なのは・・大丈夫かしら。」

桜花「なら俺に任せろー！アリサよー！冒険ついでになのはとあのフュ
レットを連れ戻してくるからー！」

そりひつて俺も森へ入つて行つた。

「森の中へ

猫「にゃあああああおおーー！」

桜花「おおへでかいなー・・おつとお面お面・・装着ー！」

桜花「といえばフロイトの家じや、はずしてたなコレ・・まこつか

桜花「とつあえず、現在進行形であの一人が戦つてるわけですが・・

「

イカロス『そういういえばマスター、観戦するんじやなかつたんですか
？』

桜花「ん、気が変わった。ていうか読者もそろそろ戦闘とかチート
無双が見たいんだよ」

イカロス『メタ発言全開ですね。もう少し控えてください』

桜花「善処しますよ。んじゃ行こうかー！」

イカロス『Set up.』

桜花「おおう！？ いきなりセットアップすんなよ、びっくりするだろ！？」

イカロス『マスター、ここはリリカルなのはなんですからちゃんとバリアジャケット着て下さい。』

桜花「それにしても・・・これが俺のバリアジャケットか・・・なんか和風だな？」

俺のバリアジャケットは上に某死神漫画の隊長羽織っぽいのを着て腰を緑色の帯で軽く縛つてある。
下には青黒い袴をはいていて、後ろに羽織がはためいてる・・・なんかマジ和風というかこれでホントにバリアできんの？
って感じだ・・・

桜花「ま、いつか。お面にも合つし」

イカロス『そんなことはいいですから、やるなら早くしましょう』

桜花「OK。んじゃ初魔法行きますかー！ イカロス光速砲撃シフト発動！」

イカロス『了解、光速砲撃Set up!』

桜花「収束開始」

イカロス『ターゲットロック、収束・・・・・・・・完了！』

桜花「んじゃ、二人には墜ちてもうひよー！ バースト！ー！」

イカロス『光の魔弾！！』
レイ・キャノン

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

フェイト視点

あの子がうちに侵入してきた田から数田手に入れたジュエルシードは2つ。

今日も発動を感じてやつてきたんだけど・・・いつもと違つたのは白い魔導師の子がいたこと。

向こうもどうやらジュエルシードが狙いみたい・・・でも、渡すわけにはいかないんだ！

なのは「シユートー！」

フェイト「くつ・・・（幸い）、相手はそんなに強くない・・・魔力が高いだけ。これなら行ける！）」

フェイト「プラズマランサー！」

バルティツシュ『Plasma Lancer!』

フェイト「ファイア！」

黄色い魔力弾が、なのはに向かっていく。
着弾と同時に爆発し、煙に包まれる。

フェイト「（多分、当たってない。だから出てきたといひをつー
ー！？）」

わたしは、出てきたあの子に追撃しようとした。

そしたら、いつまにか私は光に包まれて地面に向かって落ちていた。

「フヨイト」な・・なにが・・・?」

わたしが意識を保つてたのはそこまで、最後に見たのは二丁の銃のデバイスを構えるお面の子と私に向かってくるアルフの泣き顔だつた。

なのは視点

なのは「あの子・・・強い!」

私、高町なのははジュエルシードを探しに森へ入った。でもそこには大きくなつた猫さんと金色の綺麗な髪をもつた女の子がいた。

彼女はジュエルシードが目的で来たみたい。話をしようとしたが、できなくて攻撃されたの。

そこから今、向こうの方が強くて押されてる・・

なのは「くづ・・・レイジングハート!」

レイハ『ディバインバスター!』

なのは「シユート!」

私の出来る攻撃を打つ!でも、簡単に避けられちやつた・・!

フュイト「プラズマランサー！」

バルディッシュ『Plasma Lancer!』

フュイト「ファイア！」

黄色い魔力弾が襲ってきた！

なのは「くつ・・・！」

急いでシールドを張る、そして上に離脱・・・しようとした

なのは「え？・・・な、なにが・・・？」

いきなり光に包まれて、地面に落下していた。

なのは「う・・・」

見ると向こうの子も落とされてた。意識を失う寸前、私はコーコーくんに会った時みたお面の子を見た。

桜花視点

桜花「ふつ・・・この攻撃さ、結構威力低い割に必ず当たるから鬼畜だよね」

イカロス『いや、マスター。光速で放たれる攻撃を防ぐはまだしも避けるなんて出来ませんよ普通』

桜花「え？俺出来るけど？」

イカロス『それはマスターが異常なだけです。』

桜花「さて、あの一人の視点の内にジューエルシードも回収したこと
だし。なのは連れて帰るよ！」

イカロス『え？あの子の怪我はどうす・・ああ、能力がありました
ね・・』

桜花「そのとおり！あらゆる怪我を治す程度の能力を創造！」

桜花「あ、いたいた。なのは！・・・ゴー、今から見たことは内
緒な？」

ポウ・・・キューーーン・・

桜花「よし、治つた・・・」

ゴー「・・・（そんな・・なんだ！今の力は！？）」

桜花「よいしょっと、結構軽いな」とつ。「

なのは「う・・・ううん・・」

桜花「じゃあ、帰るぞ。ゴー」

その後背中のなのはを見て、アリサとすずかに迫られたのは別の話。

桜花「フェイントはどうなったかな？」

イカロス『大丈夫でしょう。マスターあの攻撃3・7で威力配分してましたし。』

桜花「いや、母親にあんな折檻されてるの知つてたら手加減もするでしょ？」

イカロス『いいかげん、なのはのほうが可愛しきになってきた・・・』

桜花君のなのはの初戦闘介入（後書き）

終わります。

そろそろプレシアと会つかな？

桜花君が温泉旅行に来たよー！（前書き）

けいおん！の休止からすこしだけプロローグを編集しました！

桜花君が温泉旅行に来たよー

どつもー、いつも元気な桜花君です！

えー前回、なのはとフロイトの両名を吹き飛ばした俺ですが。あの日から数日たちまして。

今は、なのは達と鳴海温泉に旅行に来ています。親のいない俺がどうやって来たか？福引で当たったのだよ！幸運能力作つて！イカサマ？ははは違うな、これは頭脳プレーと言つて欲しいね！

桜花「でだ、なのはよ。」

なのは「なに？桜花君？」

桜花「君のその首飾りはなんだね？いつも付けているが？」

はい、レイジングハートの事です。あえて意味も無く突っ込んでみたり！

なのは「いや、これはその・・・わつ・置・わついたのー。」

桜花「へーそーなのかー」

アリサ「ほら、なのはもアンタも置いてくわよー早くしなさー。」

桜花「まあ、落ち着けよアリサ。だからシンデレレと言われるのだ。」

アリサ「私はシンデレジヤないー！」

桜花「アリサ、シンデレは決まってそういうんだ・・諦める」

アーヴィング「エーベルベリ...」

すすか「まあまあ、アリサちやんはもう遅れちゃうよ~」

桜花「行くか、魔王よ」

なのは一うん!「

なのは「つてさりげなく魔王つてよんだでしょー! なのはだよー!」

桜花「え？君何言つてんの？」

なのは「むがあああああーー！」

今、私はジュエルシーードの反応を追つて温泉旅館に来てる。でも昼間に封印するのは危ないし人に見られるかもしねないから。今は待機状態。アルフも温泉を楽しんでるみたい。

フロイト「私は、ここのまま待つてようかな。」

フロイト「ん？・・誰か来る？」

桜花「おー・・私の嫁はつけーん！」

そこには、この前私を抱きしめてきた男の子だった。

桜花「どしたの？・・あ、ジュエルシーードか。そういうえばこひぐくんにも置いたな確か。」

フロイト「・・・貴方の目的は、なんなんですか？私たちに回収させて・・・いつたい何を・・・」

桜花「ん～？いや特に目的はないんだよ。ジュエルシーードだつて君らが集め始める前に全部集めただけだし。正直・・・いらないし？」

フロイト「なら、なんでこんなことを？」

桜花「いらない、うんジュエルシーードはいらないよ？でもさ、ビーセなら面白いほうがいいじゃないか。丁度集めてる役者もいるんだし。だったらばらまいて競争させた方が面白いもん。」

わたしは、その考えを聞いて少し腹が立つた。母さんのために動いてる私や、何か事情があつて動いてる向こうの子の気持ちを、ただ面白がるために利用してるこの子は、少し許せない。

フェイ特「つ！なんで・・・君はどうしてそんなふうに考えられるの！？」君は私のジコヘルシードを集める理由を知ってるらしいけど、どうしてそんなふうに動けるの！？ただ面白いからだなんて・・ひどいよ！」

桜花「・・・はあ・・・」

桜花「知るかい、そんなもん。お前の理由とかは俺には関係ないだろ？母親の為？結構じゃないか、でもな俺がその理由を知ったからって、お前にジコヘルシードを渡さないといけない理由にはならないだろ？」

フェイ特「それは・・・そうだけビ・・・」

桜花「いいかフェイ特。俺は、面白いことが好きだ。悲劇だろ？と喜劇だろ？となんだろ？と面白いものが好きだ。だから俺は、皆が笑っている物語が好きなんだよ。」

フェイ特「それは・・ハッピーハンドとかしか嫌つて」と。

桜花「その通りだ！俺はなんだろうと最終的には皆が笑つてて幸せなラストを迎えることしか認めない！」

フェイ特「じゃあ、このジコヘルシードの事も？」

桜花「おつ、最後の最後にはお前もなのはもお前の母親もお前の使い魔も全員幸せにしてやるよ！」

彼の言葉を聞いた後、私は驚いた、そしてすこし安心した。面白い

ものが好き、その思想の裏には皆を幸せにしたこと、こう想いがつまつっていたから。

フエイト「えう・・・えうなんだ。じゃあ、もうここよ・・・

桜花「そつ・ん・というかお前、結構顔色悪いな・・おいちゅうとこひれい。」

彼が私を呼ぶ、そんなに顔色悪いかな?えおもいながら彼のもとへ近づく。

桜花「ふむふむ・・・あ~あ~・・ダメだこりや。お前まともに食事とつてないだろ?それに睡眠も足りてない。」

う、的確に指摘してきたよ・・・

フエイト「いやでも・・・ちゃんと栄養食品は食べてるし、2、3時間は毎日寝てるよ?」

桜花「黙れ、お前はナポレオンか。いいから俺に任せろ。」

彼は私の頭に手を乗せ、1・2秒後には手を離した。すると私の体のだるさや疲れ、折檻による癌や傷・・あとこの前の前の手に受けた傷がなかつたことのように消えた。どうして!?なんでこんな・・・

桜花「『大嘘憑き』全てを虚構にしてしまつ最凶のスキルだよ。」
「オールファイクション

フエイト「おーる・・ふいくしょん・・?」

レアスキルだらうか？

桜花「つまり、今のはフェイトの体の疲れや傷を”無かつたこと”にした”つて訳だ」

そんな因果を捻じ曲げるような力が・・！？・・ううん、彼は私を治してくれたんだ、気にしちゃダメだよね。

フェイト「えと・・ありがとう・・あーと・・？」

桜花「おおっと、俺の名前まだ教えてなかつたな。俺は風華桜花。桜花君と呼びたまえ。」

フェイト「桜花だね。私はフェイト・テスターッサ。よろしくね」

桜花「見事なスルーだなおい・・。んじゃあ。そろそろ行くわ、せいぜい頑張れよ。・・・あ、あと俺の事はなのはや管理局とか会つたら言わないでくれ。今の力の事もね。」

フェイト「うん、分かった。またね、桜花。」

彼との一度目の出会いは私にとって有意義な時間になつた。

桜花君が温泉旅行に来たよー！（後書き）

はい出ました大嘘憑きー！はい定番のチート能力ですねえ。
でも後々制限するとかしないからねー！！
でもやっぱり文才が欲しい・・

桜花君が温泉旅行に来たよー! 2 (前書き)

温泉編終わりです。

桜花君が温泉旅行に来たよー2

いつも、前回フロイトさんに対する「一だけちょっとかい掛けた桜花君です。

今はあの後、なのはたちと合流し温泉に入っています。

桜花「はふ～・・・電気風呂に入りながら2・3時間足元でずっとマッサージしてもらつて、そのうえコーヒー牛乳をあおつてる感じに気持ちいいなあ」

恭也「どんなたとえ方なんだ・・・」

士郎「ははは・・・語彙力豊かな子なんだね・・て、君に少し話があるんだけどいいかな? 桜花君?」

桜花「・・・なんですかね?え~と恭也さん?士郎さん?どうち?」

士郎「ああ、僕は高町士郎。なのはの父親だよ」

桜花「ですか。んじゃ恭也さんは向こうの女風呂にドモ行つて下さい。」

恭也「なんでだ! ! ?」

桜花「士郎さんが俺に話があるようなので、恭也さんには席を・・いや場所をはずしてもらおうかと。」

恭也「俺には、席も場所すらもくれないのか! ! ?」

桜花「冗談くらことは普通に流しまじょうよ、なにカリカリしてるんですか？」

恭也「むぐ・・だが俺もここに面をせてもひつからなー。」

桜花「いいですよ。・・それで、話ってのは十中八九なのはの事だと思いますが・・なんでしょうか？」

士郎「いやね、なのはが最近君の事ばかり話すもんだから気になつてね」

桜花「へ・・あのなのはが俺の事を・・周りに男子がいないんじゃないんですか？」

士郎「ん?どうこう」とだい?」

桜花「だから、周りに男子がいないところに俺がたまたま来たって話ですよ。珍しいんじゃないですかね?」

桜花「ま、このままいけばアイツ絶対男の噂も無いまま行きおくれになりますよ?」

士郎「な、なに!君!なのはに限つてそんな」とはー。」

桜花「言えるのか!ただでさえなのはには男の噂もなく、珍しく周りに現れた俺にも」「うやつて父兄が詰め寄つてくるんだぜ?・どうだよその辺?」

士郎「た、確かに!?そつか・・そうしたらなのはの未来は!?」

桜花「ああ・・・確実に未婚者のまま・・・人生を終えるだりつ・・・

」

恭也「ああああーーー?なのはああーーー?」

士郎「だめな父親を許してくれーーー!」

桜花「やつぱおもしろいこなこの家族」

そして俺は先に風呂を出た。

なのは視点

今、私はアリサちゃんとすずかちゃんと一緒にお風呂を上がって部屋に向かう途中にオレンジ色の髪のお姉さんに絡まれてます。

なのは「えと・・・なんですか?」

アルフ「ふ〜ん・・・《良く聞きな。いいかい?これ以上フェイトの邪魔をするなら・・・がぶつと行くからね》」

なのは「ー?」

アルフ「あはは、見間違いたい。『めんねお嬢ちゃん達、じゃあね～』

そういうて、お姉さんは行っちゃいました。

なのは「《ゴーノくん》・・今のつて・・」

ゴーノ「《うん、おそれあの黒い魔導師の仲間だらうね》・・」

アリサ「なにあれーなんなのよーあの酔っ払い！むかつぐーーー！」

すずか「アリサちゃん、落ち着いて・・！」

なのは「あはは・・」

桜花視点

桜花「ふむ・・アルフがなのはに絡んでんな・・あ、じつち来た。」

アルフ「・・あ、あんたはー！」

桜花「おいつすアルフ。お久しぶり！我が嫁は元気か？」

アルフ「フヒイトはアンタの嫁じゃない！それにアンタに教える義

理も無いね！」

桜花「ま、やつを余りてきたんだけだねー！」

アルフ「なつ・・・あんたフュイトに何かしてないだろ？ オ・・・」

桜花「ふつ・・・まあ、それは自分の田で確かめるんだな・・・ほら速く言った方がいいんじゃないかな？」にやり

アルフ「つーーー？ フュイトーーー」「ダッ

桜花「・・・ふふふ

イカロス『さすがに酷いんじゃないですか？』

桜花「いやいや・・・だつてここまで5つの世界全部性格を変えて活躍してたんだぜ？ たまには素を出したこよ

イカロス『そうですか。ならいいです。』

桜花「さて・・・ジュエルシードをフュイトが封印したぞ、そんでなはい、時間が飛んで夜になりました。卓球とか、混乱した恭也さんたちがなのはに詰め寄る様はとても面白かったです。

桜花「さて・・・ジュエルシードをフュイトが封印したぞ、そんでな

のはも飛んできたぞつと

イカロス『マスター、これからどうするんですか？また打ち落とすんですか？』

桜花「いやイカロスお前・・それは鬼畜すぎんだろ」

イカロス『では、どうあるので？』

桜花「ん～・・そうだね・・どうしようが？」

イカロス『私に聞かないでください。』

桜花「んじゃ、あれだ。なのはが負けるはずだから・・・よし介入しよう、そうしよう」

イカロス『その後は？』

桜花「ん～、一旦去つてなのはを迎えて来た設定でなのはに近づこう」

イカロス『了解です。とりあえずSet up』

桜花「またいきなりですね。イカロスさん・・」

三者視点

現在、なのはとフロイトは戦闘を行つてゐる。
ジユノルシードを先に封印したフロイトのもとへなのはやつてきた
からだ。なのはの援護をしようとしたコーコもアルフと戦闘を行つ
ている。

フロイト「へッ…」「

なのは「レイジングハート!」

レイハ『ディバインバスター!』

なのは「ディバイン!バスター!…!」

どおおおおおおおん!-

なのはの「ティバインバスター」がフロイトに向かいつしかし

フロイト「はあ…!」

フロイトはシールドを張りそれを防ぐ。

なのは「どうして」「んな」「とじてゐるの…おはなし聞かせて…」

フロイト「話しあうだがじゅ…なこも変わらない…」

バル『プラズマランサー!』

フェイト「ファイアー！」

また、フェイトの魔力弾がなのはに向かいつ

なのは「きやあ！」

レイハ『マスター！』

そのときレイジングハートがとつぜになのはの足に羽根をはなしスピードをあげその場をかわす。

なのは「あ、ありがとう。レイジングハート」

レイハ『いえいえ、マスター来ます！』

話している隙にフェイトがバルティッシュを鎌の形に変えて迫つてくる。

なのは「うん！ レイジングハート！ もう一回、ディバインバスター！」

レイハ『ディバインバスター！』

なのは「シューター！」

なのはの砲撃がフェイトに向かい、当たる。

なのは「・・・やったかな？」

なのはが警戒を解いていたその時

レイハ『マスター!』

砲撃をかわしたフェイトが上から迫ってきた。

なのは「あつーぜやあー！」

フロイトの鎌がなのほの首にあてられる。

コノハ - なのは！」

エリノかなのはを心配してアルフから田を離す。すると

「アリ」
よそ見してゐる場合かし！」ハキイイ！

「ノル、何!?」「わあああ!!!」トシヤ!

卷之三

と負けを認めたレイジングハートがジョーカルシードを一つ出す。

「トントクバーゲン」

アエイト、主人の想いの深い子なんだね。・・・

とフエイトがそれを取ろうとした時

— — — — —

！――――――――――

一人の上から、無数の魔力弾が降り注いできた

「フュイト」「ー・?・きやあああああー・!・」

なのは「きやあああああー・!・」

その不意打ちに一人は避けられず地面に落ちる。そして何とか耐えた一人は上を見る。そこには。

桜花「ははははー・ジユエルシードはいただいたアー・!・」

最狂無敵の転生者が嘲笑つようじユエルシードを手にしていた。

「フュイト」「君はー・?・」

なのは「あの時のお面の子ー・?・なんでこんなとこひるー・?・」

桜花「お面？ああ、これの事か・・悪いなア・・さつきまでの戦い、ちゃんと見てたぜー！」

桜花「まあ、こんな簡単にユエルシードを手に入れられるとは思わなかつたけどねー！」

なのは「それは、今の真剣勝負に勝つたフュイトちゃんの物だよー返してー・!・」

桜花「はあ？返すわけないだろ？・・でなきやとつたりしないし？」

なのは「ぐつ・・・ー・?」

フュイト「ーー・?」

ヴン！-

そんな音と共に蒼黒い色のバインドが一人を捉える。

なのは「なあ！-!?-バインドー・?むぐぐ・・・-!-!

フュイト「はあー-!・・ぐつー」

フュイトとなのには必死にバインドを解こうとするが強力すぎるバインドだから全然解けない。みるとアルフやコーノも捕まっている。

桜花「んじゃあ、これで俺はいくわ。そのバインドも少ししたら解けるから。じゃねー」

と言い残して桜花は飛んで行つた。

なのは視点

・・・

桜花「んじゃあ、これで俺はいいわ。そのバインドも少しあしたら解けるから。じゃね~」

そうこうしてお面の子はビームがへ行ってしまった。
私はとても悔しかった。黒い魔導師の子に負けた、セーラージュノール
シードまで奪われちゃった。

私はとても弱かつた。その事実がとても悔しくてならない。

なのは「・・・」

フロイト「ぐつ・・・んんん!-!」ぐぐぐ

隣では黒い魔導師の子がバインドを解いていた。
だから私は話しかけてみた。

なのは「ねえ、きみの名前はなんていつの?..」

フロイト「つー?・・・私は・・・フロイト・テスタークサ・・・」

なのは「私は、高町なのは・・・ゆうじゅねフロイトちゃん。」

フロイト「え?・・・えと・・・つん・・・」パキイ!

そうじてるとフロイトちゃんのバインドが解けた。私はまだ解けない。

フロイト「・・・それじゃ・・・」

フロイトちゃんはオレンジ色のお姉さんのバインドを切り裂いて去つていく

なのは「待つて！」

「フエイト、もう私の前に現れないで。次来たら……手加減できない。」

そう言ってフエイトちゃんは去つて行った。

そしてさつきまでの悔しさがこみ上げて来て、泣きそうになつた。

そんなところに……

桜花「おーいたいた……なに泣いてんだ? なのはよ。」

いつも私をからかう桜花くんがやつてきた。

なのは「おう……か……君……!？」

桜花君が温泉旅行に来たよー! 2 (後書き)

バインドで捕まり、さらばバリアジャケットコレイジングハートまで持ってるなのはの元へ現れた桜花君! まあ、どうなる! !

桜花君が温泉旅行に来たよー・3（前書き）

温泉編終わり！

桜花君が温泉旅行に来たよー・3

どうも、前回見事な悪役っぷりを見せた桜花君です。
そんでなのは達の前から去つた俺は今、元の姿になり何食わぬ顔で
なのはの元へ！

桜花「おーいたいた・・なに泣いてんだ?なのはよ。」

なのは「おう・・・か・・・君・・!?」

おーびっくりしてゐ。どれ追撃!

桜花「なのは・・その服はなんだ?コスプレか?杖まで持つて・
ん?オマエの周りのその光ってんのは・・」

なのは「え!?いや、あの・・これはその・・」

俺が指摘したのはバリアジャケットにバインドの事だ。

ちなみに普段は魔力を抑えてるから俺は魔導師とばれないのだ

桜花「ふむむ・・・あれ?魔法的な奴か?お前魔法使いなの?」

さらなる追撃。

なのは「え!?あわわわわ・・・」

桜花「ま、そんなことほどーでもいいんですけどねーそれより早く
帰ろっぜ・・俺は眠いんだ!」

なのは「え・・・？あーうん！」

と、なのはと帰ろうとするが、だがしかし！なのははバインドに捕まつていて動けない！

なのは「・・・桜花くん・・・これのせいで動けないん・・・だけど・」

桜花「ん？なのはよ・・・それはなんだ？拘束術の類か？」

なのは「う・・うんそんなどう・・・」

桜花「ふうん・・・」

俺は、なのはに近づきバインドに触れる。
まあ、俺のバインドだし解けない」とはあり得ない！

桜花「えい」

パキイン！

バインドが音を立てて壊れる。

なのは「ええええー！？なんでー！？」

桜花「なんだ・・・結構脆いじゃないか・・ホラ行こうぜー！」

なのは「う、うん・・・」

そうして俺となのはは旅館に戻った。

フェイト視点

今私はあのお面の人に襲撃されてジュエルシードを取られてから、アルフと家に戻っている。

アルフ「フェイト・・まだ」飯食べてないねーちゃんと食べなきゃダメだよー」

フェイト「大丈夫・・少しだけど、ちゃんと食べたから・・

そう言ってアルフをなだめる。

明日は、母さんの元へ中間報告しに行く予定だし、早く寝ないと・・

フェイト「おやすみ・・アルフ」

アルフ「う・・うん・・おやすみフェイト・・」

アルフ視点

私の主人、フェイトが寝た後私はベランダに出た。

アルフ「フェイト・・・」

フェイトの身を心配していた時

桜花「おー? なにたそがれてんだ? アルフ?」

あの時、フェイトに抱きついてきたあの男がやつてきた。

アルフ「あ！お前！あの時フェイトのところに全力で戻ったけどフェイトなんにもなって無かったよ！騙したなー！」

桜花「あ、あの時のか？」「めん忘れたわ。」

アルフ「このつー・・・まあいい、それで何しに来たんだい！」

目的が何につの場合はっきりしない・・何しにきたんだ・・

桜花「いやね・・そろそろ大幅な介入をしてやるひつとねー」

アルフ「どうじうことだい・・？」

桜花「つまり、フェイトとその母親、プレシアの仲を直す。」

アルフ「！？そんなの・・・どうやって・・・」

桜花「簡単だ、フェイトの集めてるジュエルシードの使用目的を先に叶えちまえばいいんだよ。」

アルフ「え？」

桜花「ジュエルシード集めてることはそれを使用する目的があるわけだろ？なら先にそいつを叶えちまつて、そのあとはもうやりたい放題出来んじゃん？」

アルフ「え・・・そういうえば・・やうなるね・・」

桜花「だから、俺も明日プレシアんとこに行くわ。」

え・・?」「いつ何言つてんの?

アルフ「何言つてんだい!!そんなことできるわけないじゃん!!
!」

桜花「俺に出来ないことは……うん、ほとんどないぜ!!」

アルフ「……もういいよ、勝手にしな!」

もひ、投げやりになつた。

桜花「んじゃ、旅館に戻るわ。明日の昼辺りにはこっち戻るからち
したらお邪魔するわ」

アルフ「はいはい……もういいでしょでもなれ……」

桜花視点

そこで旅館に戻ってきた私桜花君です。

現在、日が明けて朝。帰る準備をしています。

土郎「なのは達は帰る準備できたかい?」

なのは「うん!…できたよ!」

アリサ「はい、大丈夫です!」

すずか「だいじょ「づびです。」

桜花「アリサつて・・敬語できたんだ・・あ、おれも完了です。」

アリサ「私だつて礼儀くらいはわきまえてるわよ！-！」

士郎「それじゃあ、行こうか。」

その後チェックアウトをとり、車に乗って鳴海市へGO！-！

・・・移動中・・・

はい到着！2日ぶりの我が家です。

桜花「ありがとうございました。士郎さん」

士郎「いやいや、それじゃあね。桜花君」

なのは「ばいばーい！」

桜花「おう、じゃあね」

さて・・行きますか！時の庭園！-！

桜花「イカロス」

イカロス『はい、といつか出番が遅いです。』

桜花「気にするな。んじゃ 転移よろしく。」

イカロス『・・了解、転移。』

次の瞬間、俺は時の庭園に来ていた。

桜花「お～ここが・・・」

「なんか向こうの方からバチャイ！バチャイ！」って音と悲鳴が聞こえるよ？」

イカロス『はい・・ 原作通り折檻されてるんでしよう・・』

桜花 止めに行こう、そうしよう。

プレシア視点

あの子、フェイトが持つてきたジュエルシードはたつたの3個・・
正直失望したわ。

だから今、折檻している。今日の前でフェイトはボロボロになつて

倒れている。

「……………次はちゃんと集めてきなさい」・・・ジュエルシードを

フ ハ イ ツ 「 ． ． は い ． ． ゆ れ ん ． ． つ ． ． 」

そして奥の部屋へ戻ろうとした時。

「うわー家庭内暴力だ！幼女虐待だ――！！つてことで俺の嫁傷つけた罪は重いぞコラ！デコピソ10発の刑だ！！」

どこの誰だか知らない子供が、そんな言葉と一緒に入ってきた。

桜花君が温泉旅行に来たよ！3（後書き）

ちなみにフェイトは天然・A+なんで桜花君とお面の人は別人と考
えてます。

桜花姫ヒカルシタそんじアロシア（前書き）

今回は、原作ブレイクしました。

桜花君とフレシア そんでアリシア

はいどうも、毎度おなじみ桜花君です。

前回、温泉旅行の中でしつちゃかめつちゃかかきまわした揚句、フレシアん家に乗り込みました。

現在、フェイトちゃんが目の前でぼろ雑巾のようになつて少し怒つてます！

フレシア「・・それで、貴方はだれのかしら・・それにデコピン10発つて・・」

桜花「そうだ！私の可愛いフェイトちゃんの体にこんな傷をいっぱい作りくさつてなめた真似しくさるのう！覚悟はええんか…おおー！」

フレシア「な、なんなのよ・・別に私の所有物なんだから何しようと勝手じゃない・・！」

桜花「ん？・・それもそつか・・?まいつか、どうせ元通りに戻せるし。」

俺はフェイトに近づき大嘘憑きを発動させる。
ん？フレシアの顔が固まってる。どうしたんだう？

桜花「どうした？フレシアよ？」

フレシア「今、何をしたの・・?魔力も感じなかつたし・・」

桜花「これが？これは俺の・・レアスキル？の大嘘憑き。オールファイクション死ですら

虚構に出来るスキルだよ！」

プレシア「…？・死んだことも虚構に出来るですか？」

イカロス『（マスター・大丈夫ですか？そんなこと言つて…）』

桜花「（大丈夫だ。悪用されないよ！）」
一人につき一回までだけね？」

フレシア「どういってコト？」

桜花「例えば、アンタが死んでそれを無かつたことにして生き返らせるとしよう。そしたら、もうアンタはこのスキルじや生き返らせられないってことだ。逆を言えば一回までなら誰でもうつと、人間じやなかろうと生き返らせられる。」

フレシア「それは本当？なら…」

桜花「んじゃ、俺は帰るわ。」

フレシア「待つて！貴方に…頼みたいことがあるの…」

まあ、十中八九アリシアの蘇生だろ？けどねー

フレシア「娘を…生き返らせてほしいの…！」

桜花「…ジュエルシードもその手段か？フェイトも…」

フレシア「ええ・・そのためにアリシアのクローンであるフェイトを作ったのよ・・でも! フェイトはアリシアにはなれなかつた! だから、フェイトは私が慰めに作ったお人形・・ただの人形なのよ!」

桜花「へー、そーなのかー。」

ルーアの真似をしてみる。結構便利だぞこれ。

フレシア「・・で・・どうかしら・・?」

桜花「率直に言おう。お前がその考えを捨てるなうえよ!」

フレシア「? その考えとは・・?」

桜花「フェイトを人形扱いするのはやめる。ちゃんと娘として愛せ。」

フレシア「・・・どういづ」「ト・・?」

桜花「はあ・・いいか? あんたがどうであれアイツはアンタの娘だ。アリシアじゃなくフェイトって言うアンタの娘だ。逆にアイツにとつての母親は世界で唯一アンタ一人だけなんだよ! 過程はどうあれ生み出したのはアンタだ!! それに・・アリシアをこのまま生き返らせたら・・アリシアは絶対悲しみに包まれるぞ? いいのか? 理由は・・言わなくても分かるだろ?」

フレシア「・・・ええ・・分かるわ・・私も・・フェイトを娘として認める事でアリシアを失くした事実を受け入れたことになる気がして・・そのことから目を必死にそむけてたから・・・でも、もう逃げない。」

「 桜花 「 そ う か 、 ん じ ゃ 、 、 、 」

プレシア「ええ、フェイトも私の娘・・愛すべきもう一人の娘として・・向き合っていくわ。許してくれるか・・分からぬけどね?」

そういうてプレシアは悲しそうな、不安げな笑みを浮かべた。

桜花「だーいじょーぶ！私のフェイトちゃんは天然で人見知りでなによりマザコンが入ってるから！」

「…そういう関係？」

「んう・・俺が座ってる時に俺の膝の上に座るくらいの関係?」

そういうと、後ろから後頭部を蹴られた。

「ふざやあ！！！な、なんだ！？」

アルフ「あれはアンタがフェイトを座らせたんだろうが！！」

「あ、アルフ！？また、話しき

フレシア「・・あの・・そろそろ此こかしら~。」

桜花「お・・・おつ・・・じやあ・・アリシア・・蘇生しようつか・・
・・」すりすり・・

フレシア視点

最初は、訳が分からぬ男の子・・でも今は、フェイトと向き合わせるきっかけをくれた人・・
その恩人は今・・

桜花「さて、んじゃアリシアを生き返らせよつか!」

フレシア「さつきまでぼろぼろだつたのに・・

桜花「俺の大嘘憑きは怪我ならいくらでも直せるんだよ。」

フレシア「管理局の医療班に見せたら泣くわね。」

桜花「まあ、俺のレアスキル?はこれだけじゃないからな・・多分、管理局程度なら片手間で潰せるぞ?」

フレシア「・・・大嘘憑き?だったわね・・その時も思ったけど・・規格外すぎない?あとどのくらいあるのよ・・

桜花「えーと・・・大嘘憑きと同じカテゴリに分類されるのは・・1

京2858兆519億6763万3865個くらいかな?この他の
いろいろあるけどね」

フレシア「・・・もう、なにも言わないわ・・・

桜花「んじゃ、行くよ・・・」

あら、気がつけばアリシアの田の前に来てたみたい・・・

桜花「まほは・・培養機からだして・・・わお素っ裸だ」

フレシア「あー・・・これを着せてー・・・」

と私は焦つてそこへあつたゴートを渡す。

桜花「ん?うん、分かった。」

彼は、アリシアにそれを着せた。

桜花『んじゃ、行こつか It - 011 fiction』

彼が、口調を変えてそう言った。なにか気持ち悪いものを見た気がするけど、すぐに引っ込んだ。

桜花「ん、オッケーかな?おーい、アリシアちゃん?起きて「ペ
ちペち

アリシア「・・・

フレシア「・・・ちゃんと生きてるわよね?」

内心、ドキドキしながら見る。

桜花「ん？「ん。一応息はしてるし、脈もある。生き返りは成功だよ～さて、起きて・・・おーい？」

アリシア「う・・・ううん・・なにー・・？」むくつ

アリシアが起きた・・私はその瞬間涙を抑えられず、泣きながら抱きついた。

フレシア「アリシアー！かつた・・本当によかつた・・」

アリシア「え？ビ、ビ！したのおかあさん・・？」

フレシア「いえ・・ちよつと・・嬉しくてね・・」

桜花「・・・」

アリシア「あ・・・」

桜花「・・・（アリシアが俺に気付いた・・フレシアは抱きついてるから背後の俺に気づいてない・・どうする？空氣だぞ？俺・・）

アリシアと桜花は向き合つて、視線を合わせ見つめあっている

アリシア「・・・

桜花「・・・（念話じよう・・アリシアには・・うん魔力はあるな。ん！おーい聞こえるか？）」

アリシア「…………（え！？な、なに！？頭の中に……）」

桜花「（うん、今日の前に居る俺が頭に直接話しかけてるから、頭で考えれば会話できるよ。）」

アリシア「（…えと…今…おかあさんがだきついてきてるのつて…？）」

桜花「（うん…アリシアちゃん自分が死んでたのつて…分かる？）」

アリシア「（…うん…わかるよ…）」

桜花「（せう…じゃあ、説明するねまずは今この状況から）」

・・・・説明中・・・・

桜花「（ついで訳。分かつたかな？）」

アリシア「（うん…ありがとうございます、お兄ちゃん…）」

桜花「（…超幸せ…と…まだ、今はお母さんと話しあして妹に会うところよ。じゃあ、俺は帰るねーまた来るよー）」

アリシア「（うんーまたねー…）」

桜花視点

いやー、アリシアちゃんの笑顔はいいねー···癒されるわ···

桜花「さて···これからどうじょうづか?·とりあえず家に戻つてきた
訳だけど···」

イカロス『次は、暴走事件でしたよね?』

桜花「うん···あ、明日だよー。」

イカロス『でも···プレシアの目的は達成したから···もつフュイ
トは来ないんじゃ···』

桜花「ん~ん!大丈夫!一応、これと同じ手紙を置いといたから。」

プレシアへ···

あ。そういうえば血[口]紹介してなかつたね!

俺の名前は風華 桜花!9歳です!んでアリシア蘇生してなんだけ
ど、頼みがある。

ジユエルシード集めを続けてほしいんだ。

理由は、お前達テスラロッサ家が犯罪者として管理局に捕まりないようになるため。

幸い、向こうの対応が遅いこともあるからそこを利用せねばいい。

これは被害が出なことより善意で集めてたんですねって言こ張るぜー。
んじゃ、セレニティによりしへ。フロイトとアロシア・・あとアルフ
にもよろしくて言つてくれば…じゃねー！

桜花「どうよ？」

イカロス『マスター・・結構手回し良くてですね・・』

桜花「いや・・だてに600年近く生きてないからね・・」遠い田

イカロス『マスター・・』

桜花「んじゃ・・今日もう遅いし・・寝よつか！」

イカロス『・・・スリープモード・・・』

桜花「・・・俺より先に寝ひきつひとつ？読者達・・・ぐすり

桜花君とアレシア そんでアリシア（後書き）

戦闘ないと結構楽だわ ・・

ま、でもK君はフルボッコですけどねーーー！

次回は暴走事件です！

桜花党和暴走事件その後フジTVアートのお風呂ー（前書き）

今回で、なのはとの活動を開始しフジTVアートのお風呂にも入りまや。

桜花君と暴走事件その後フュイトと6風呂

どうも、桜花君です。前回、フロイトについてつて時の庭園へ乗り込みプレシアの目的をブチ壊してやりました！

しかし・・個人的には原作の原型くらいは残したいで！フェイトにジュエルシード集めを続けさせました。

「・・・どうも、フロイトは俺の事はお面の俺と別人に考えてみたいだね・・」

イカロス『え！？ そうなんですか？ 天然すぎますね・・でもなんで分かつたんですか？』

「ん？俺の1京のスキルのうちの一
つ、『掌握』を使つたんだよ。」

イカロス『ふむ・・・効果はどのような・・?』

「…自分の置かれてる状況や周りの状況、周囲の人の自分に対する評価や認識の確認が出来るんだよ。」

イカロス『ああ、それでフェイトさんのマスターに対する認識がお面々と違つたと。』

イカロス『ひやつはああああああああ！』

桜花「ノリがいいな！？ イカロス！？」

イカロス『こうでもしないとマスターにはついてけませんよ。』

桜花「……そつか……」

フェイト視点

今私は母さんの所から戻ってきてジュエルシードを集めを再開している。

・・・でも母さん、私が帰る時暖かく送り出してくれたけど・・何があつたのかな？

アルフに聞いても何も知らない見たいだつたし・・・いつの間にか折檻の傷も無いし・・

でも、今は母さんのためにジュエルシードを一刻も早く集めないと・・！

フェイト「・・・行くよーアルフ・・・」

アルフ「う、うん・・でもフェイト！ 危険だよ！」

今私たちがやつとしてるのは、ジュエルシードを強制発動させて封印すること。

アルフが言うように今の私の魔力量じゃ結構危ない・・でも、やるしかないんだ！

フェイト「大丈夫、アルフがいるし・・私は強いから・・」

アルフ「・・・分かつた・・・でも危ないと思つたら止めるからねー！」

フェイト「うん・・・行くよ！・・・アルタス、クルタス。エイギアス・
・・！」

魔法陣が広がり魔力がためられていく・・・

桜花視点

桜花「来た！強制発動！」

なのは「え！？」

ユーノ「そんな！？なにをしてるんだー！そ、広域結界！間に合え・
・！！」

今、俺はなのはの元へ来てジュエルシードを集めることを聞きだし、手伝うところまでこぎつけた。
まあ、そこそこ今は割愛。力についてはプレシアと同じ感じに説明した。

桜花「行こう！なのは！ユーノ！」

なのは「うん……」

フェイトのもとへ俺達は向かう。

三者視点

フェイト「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

アルフ「・・フェイト・・大丈夫かい？」

フェイト「はあ・・はあ・・ふう・・うん、大分落ち着いたから・・
大丈夫。でも向こうも近くに居るみたいだ・・」

そしてフェイトとアルフはジュエルシードに向かつて飛んでいく。
一方なのは達も近づいてきていた。そして同時に封印を施す。

なのは「リリカル！マジカル！」

フェイト「ジュエルシード！」

なのは「封！」

フェイト「印！」

バルディッシュとレイジングハートがぶつかり大きな魔力がぶつか
る、その影響で両方にヒビが入りなのはとフェイトが吹き飛び小規
模な次元震が起こる。それが示すのは

”暴走”

フェイト「つ！？」

なのは「さやあ！？」

ユーノ「ジュエルシードが暴走している・・・？」

桜花「つ・・・！？アイツ！？」

桜花が見た先そこにはフェイトがジュエルシードを掴み魔力を抑え
ようとしているところだった。

桜花「ちつ・・・！」

ユーノ「桜花！？」

桜花が走り出す。

止まれ・・止まれ・・

ジユエルシーードの暴走・・予想外の出来」とだけど・・でも一母さんの為に・・・!

「ハイト、ハト・・止まれーーー！」

「何やつてんだよ・・お前は・・」

そこに、あの時私を抱きしめて嵐のよつよつと去つて行ったあの男の子
桜花がいた。

フェイト「…桜花…！」

桜花「全く・・・ホラ貸してみろ・・・ほいつとーーー」

桜花は私の手をどかしジユエルシードをつかみ取る。

られていた。

フロイト「え・・・?」
「いや、うそだ・・・?」

桜花「うん？いや・・前に教えたスキル・・覚えてない？」

フェイト「あ・・大嘘憑き・・だつけ・・?」

桜花は以前のスキルを使って暴走を無かつたことにしたみたい・・・

それにしても規格外だよね・・・

桜花「ん? フェイト! ?」

あれ・・意識が・・・

フェイト「お・・・うか・・・。」

私はそのまま気を失った。

・
・
・

アルフ視点

アルフ「フェイト! !」

あたしは氣を失ったフェイトの元へ来た。
そこには桜花もいた。傷もまた直してくれたみたいだ。

桜花「速く連れて行け。ジュエルシードもやるよ。管理局もこれで
気づいただろ? 早く逃げる。」

アルフ「うん・・ありがとう。桜花も氣をつけてね・・お面のアイ
ツがまた狙つてくるかもしれないし・・・」

桜花「・・・う、うん・・じゃあな」

そのまま私はフェイントを背負つて飛び立つた。

三者視点

なのは「桜花君！大丈夫！？」

桜花「おーなのは・・だいじょぶ だつて俺だもん！」

ユーノ「でもさつきの暴走はどつやつて・・ああ・・あれか・・」

ユーノは、さつきの暴走を収めた件を大嘘憑きの存在に行きつき納得した。

ちなみにユーノとなのはも桜花が手伝いを申し出た時に疲労を無かつたことにされたのでこのスキルを知っている。

なのは「なんか・・桜花君だからって言つのがすゞく納得できるの・

・

桜花「ジユエルシード、向こうに渡したけど・・悪いね」

「・

ユーノ「まったく悪びれてないのが腹立たしいよ・・！」

桜花「んじゃ帰らう!」

なのは「うん!」

ユーノ「うと・・・」

そうして、今回のジユエルシード暴走は収まった・・・

「フュイト家」

アルフ「フュイト・・・」

フュイト「大丈夫だよ・・・怪我も桜花が直してくれたし、疲労も消えてるから・・・」

アルフ「フュイト! こんな無茶はもうしないでおくれよ! あたしはフュイトが傷つくのは嫌なんだ!」

アルフは事情を知っているが故にやめようとは言わないが、無茶や無理をするのは止めようとする。

フュイト「アルフ・・うん・・分かった・・」

アルフ「・・そうかい・・じゅあ、『』飯にじみつけ・フエイト・」

フエイト「うん・」

アルフが部屋を出ていくとフエイトは険しい顔に戻る
なぜなら、フエイトは無理をしないことを決めたが、内心では母の
為にと焦っていたから。

桜花「『』飯！『』飯！」

フエイト「お、桜花！？なんで・・・」

桜花「いや、『』飯と聞いたから食べに来た」

アルフ「フエイト！うちら来て！なんかテーブルに料理がいっぱい・
・桜花！？」

桜花「ああアルフ、ばんわー」

アルフ「ああゼリーハーって違つわ！――」

桜花「晩御飯を食べに来た・・・といつか作つてやつたぞ！感謝し
るー！」

そつまつてフエイトとアルフと一緒にリビングへ出る。

フエイト「！、これ桜花が作ったの？」

そうフエイト達の目の前にあるのは大量の料理。しかも豪華でとて
もおこしかった。

桜花「そーだよ! 桜花君印のおいしい料理を食べるっ・食べるよね? てか食え!!」

桜花のテンションについていけず畠然としている一人。しかし桜花に勧められ料理を食べ始める。

フェイト「ー? お、おいし~よ! 桜花!」

アルフ「お~しーーー!」

フェイト達には絶賛で桜花も満足そうにし料理を食べる。そして、食べ終わるとお皿には米粒ほどの料理も残らず綺麗に完食されていた。

アルフ「うひゃあー もまーーー!」

フェイト「御馳走様でした」

桜花「おわまつせーーー」

桜花が皿を流し台に持つていき洗い始める。するとフェイトが

フェイト「あ、手伝うよー桜花!」

アルフ「あ、じゃああたしも手伝うよー!」

そういうて三人で仲良く皿を洗つ。

そして洗い終わると三人ともテーブルに着いた。

アルフ「……ってちょっと待て……」「う 桜花ああああ……！」

アルフ「はあ～・・・」

桜花と寝ぼけたフェイドは風呂へ向かう。
桜花は計画通り・・・見たいな顔をしていた。

アルフ「じゃあ、私寝てるから上がつたり起こしてね～・・・」

フェイド「うんいよいよ入る～」

桜花「風呂入るうせ～？」

フェイド「ん～なに？ 桜花？」

桜花「ふう・・・じゃあフェイド～？」

今は桜花の入れたお茶を飲みながらのんびりしている。

アルフ「はあ～・・・このお茶すぐおこし～・・・」

フェイド「ううだね・・・」

桜花「はー・・・今日は疲れたね～・・・」

・

・

・

アルフが気がついて風呂場へ走っていくと、そこには

桜花「あ、アルフ？ 起きた？」

フェイド「へ

服を着た桜花が裸のフェイドの髪をシャワードで洗つてみると、さうだつた。

フェイドは寝ぼけて「うえに気持ちがいいのが幼児化して桜花に甘えている。

アルフ「あ・・フェイド・・! 桜花・・! おまつ・・何して・・!」

驚きすぎて上手く喋れてないアルフ。そんな彼女に桜花は一言こういつた。

桜花「可愛いよね～」といつ。ほらアルフもよく見てみなよ

アルフ「あ・・ああ・・確かに・・可愛いねえ・・フェイド

フェイド「おうか～」

アルフは言われたようにフェイドに視線を移すとそこに止まっているエイトが気持ちよさそうに頭を洗われている。

桜花アルフ「ホント、可愛いね～フェイド。」

そこから頭を洗い、身体を一人で洗つて風呂から上がったあと服を

着せてるとフロイトが田を覚ました。

「ん？ 目が覚めた？ フェイト？」

「エイト」「なななななななな・・・」

フロイトはせつせつまでの事を思い出すと顔を爆発しそうなくらいに真っ赤にして固まってしまった。

桜花「なあ、アルフ？ フェイトが顔真っ赤にしてるんだけど、これ
ってやつぱ俺のせい？」

アルフ「当たり前だろうが！」

ՀԱՅՈՒԹ ՀԱՅՈՒԹ ՀԱՅՈՒԹ ՀԱՅՈՒԹ

そしてフヨイトはそのまま気絶した。

「櫻花」おひと・・寝ひもつたよフライ。なんじや俺は・・フライ
ベッドに寝かせてくるわ。

アルフ「うん・・分かつた。じゃアリビングで待ってるから話聞かせてもらひよ?」

桜花「はいはい」

1

1

・
桜花はフェイトを寝かせ、リビングへ戻つて来るとアルフが桜花に聞いた。

アルフ「で、なんでここに来たんだい？」

桜花「いや～言ふ忘れててさ。フェイトじゃ・・話しあやつた？」

アルフ「いや・・フレシアに言われて話してないけど・・？」

桜花「そつか良かつた。んじゃまずは状況と関係者について話しこうかな！」

桜花「まず、さつきお前が言つたお面の男。それぶっちゃけ俺だから。あと、白い魔導師・・こいつは高町なのはってんだけどジュエルシードの発掘者のユーノ・スクライアって奴の協力者だ。ばらまかれたジュエルシードを回収するために行動を共にしてるわけだ。んで管理局も今回の件で動くだろうから俺は向こうの協力者として動くことにする。お面の俺は敵役、つまりフェイト側の俺ってことだな。で、フェイトとアルフはこのままのはと対決しつつジュエルシードを集めてもうつかりそつこんことでーじや質問は？」

アルフ「ちょっと・・待つて・・確認。」

桜花「おう」

アルフ「アンタがあのお面の奴の正体で？」

桜花「おう

アルフ「あいつら・・なのは?達はアンタが散らばつてたジユエルシードをまたばらまいたのを回収目的で集めてて?」

桜花「おう」

アルフ「あんたは管理局側、お面のあんたはこっち側で動くつもりで？」

桜花「おう」

アルフ「あたしたちは」のままジユエルシードを集めると、

桜花「おう、そんでお前たちを犯罪者にせずにはまた暮りむかひよつてするんだよ。」

そこまで聞いて桜花は思い当たつた。あれ？これ俺がかなりかきまわしてない？、と

アルフ「アンタが全部かきまわしてんじゃん！！」

しかも結構良い方に進んでるから腹が立つ。

「まあまあ・・いいじやん？大丈夫、俺に任せろ！」にこつ

その時桜花は見た者全てが安心するような広く温かい笑顔を浮かべた。

アルフ「つ・・・・！？／／／／」

アルフはその笑顔を見て顔を赤くする。

「・・・顔が赤いぞ？風邪でも引いたか？」

アルフ「なんでもない！……」

桜花は訳も分からず首をひねるばかりだつた。

癸丑

「はははー。おはようワイトーー！」

と言つたやり取りがあつたのは別の話・・・ではないなうん

桜花君の現状確認（前書き）

現状確認です。

桜花君の現状確認

桜花君だよーーー！ 今回は現状確認です。

状況

桜花君は今のはと活動中、いずれ管理局と協力関係になるつもり。
今はフェイトの家にいます。

能力的には異常・過負荷やリリカル世界の魔法を主力としていてリミッターも付いているが、1000個ほど付けてやつとSSSランクとなり、さらに300個ほど付け今はAAランクとなっている。現在リミッター個数は1310個、約100個はずせばAAAランクに上がるため魔力量は無限近いね！！なんせ全魔力を解放したら次元断層どころが次元が粉々になるくらいだから！（結界の中なら、でもかなり強力な結界を何百と重ねた結界の中なら全開放でもOK）

なのはやフェイト、まだ出てないけど管理局側はお面の桜花と普通桜花は別人と考えている。

桜花君が来たことで原作が少しだけ変わっているようだけど今のところ大きな変化は見られていない。

（作者的には無印の間は変化を与えず、A・S編で変化を加えるつもり。）

(管理局はのぞくがクロノはフェイト達より実力は上。)

桜花君の行動記録

リリカル世界に来る

能力確認、イカロスを作る。

ジユエルシードを意味も無く集め終える。

またジユエルシードをばらまく

フロイトの家でフロイトと素顔で会う

学校に転入、お雇いには、アリサ、すずかにフタケを立てた。

温泉旅館やすずかの家の庭でお面の桜花君で介入

時の庭園でフレシアの目的を叶える

暴走事件を止める

フェイトン家で食事、一緒に風呂に入る

結果、フュイトとアルフにフラグを立てた。

いまここ

とまあ、今こんな感じですね。

桜花君の現状確認（後書き）

こんな感じです。では次回から本編です。

番外編 桜花君がDOGDEYES勇者として召喚!（前書き）

ドッグデイズの小説読んだらかきたくなつた。
結構気分屋な俺

番外編 桜花君がDOGDEYES勇者として召喚!

「召喚！勇者 桜花君だよ！」

桜花「ふむふむ、つまり？俺はビスコッティといつ国の勇者として戦に参加し勝てばいいわけですか？」

ミルヒ「はい！我が国は最近の戦で負け続きで…お願いできますか？」

桜花「いいよ」

はい、今は姫さんのセルクルツリーなんかよくわからんアヒルみたいな動物で移動中。

もちろん原作知識はもってます。はい現状確認はばっちりです。

ミルヒ「はい・・そうですね・・そう簡単には・・つていいんですか！？」

桜花「いって言つてるじゃないか。要するに、あの猫耳の奴ら全員叩き潰せばいいんでしょ？」

ミルヒ「は、はいそうですね・・あのいいんですか？」

桜花「おもしろいやうじやん？いいよ、見てる絶対勝たせてやつから。

」「いいつ

ミルヒ「あ、ありがとうございます…」

「エクレールと出会い、闇下との勝負」

桜花「ちわー、勇者参上であります！」

エクレール「む・・騎士団親衛隊隊長のエクレールだ・・

桜花「ほらほら、ムスつとしないの！ 可愛い顔してんだから笑いん
しゃい！」

エクレール「んなつ・・・何を言つてるんだ！ 貴様は！-！-！-！-！-！-！-

桜花「んで、聞きたいんだけど、紋章術つてこいつやるのであつてる
？」

桜花の手の甲に青白い紋章が浮かぶ。

エクレール「ああ、あつてるぞ。だが紋章術は体力を使う。氣をつけて
使え。」

桜花「オッケー。つとー？ ギイン！

桜花がどこからか飛んできた斧を持っていた黒刀ではじく。
ちなみに桜花君はなのはのときのバリアジャケットと同じ姿で黒刀
と白刀の一ノ刀流だよ！

レオ「ほお、今を防ぐか・・だが所詮は犬姫の手下か。」

桜花「なあ、エクレ・・・アイツむかつくんだけど。不意打ちしここで何見下してんの?ぶつ飛ばしていい?」

エクレ「馬鹿!あの方はレオン!!シロ姫、ガレット王國の姫だぞ!」

桜花「でも、今は敵軍の大将だろ?···なら潰しても問題あるま?」

レオ「それと、姫と呼ぶな!闇下と呼べ···垂れ耳···それに···

桜花「ん?···ああ、召喚されたゆーしゃの桜花君です。桜花様と呼べ!」

レオ「ほお、ワシを田の前に立たせままで面こ張るとは···覚悟はいな?」

桜花「かもーん、猫姫。格の違ひって奴をみせてやんよ。」

レオ「まず一発お見舞いしてやる···!」ゴオオオオ··!

レオ闇下の背後に紋章が具現化する。

エクレ「あれはまずい!勇者···!···?」

エクレがレオ闇下の紋章術を見て逃げようと勇者を見ると。

桜花「なら···その一発」とねじ伏せてやんよ···!「ゴオオオ!」

その勇者、桜花の背後にも大きな紋章が具現化していた。

レオ「行くぞ！獅子王炎陣！！！」

桜花「はつはア！潰れろーエセ閣下アーー！」

レオ「大爆破！！！！！」

レオ閣下の焰の大爆発が炸裂する。しかし、その大規模紋章術は

巨大な津波に飲み込まれた。

「秘技！ 桜花津波の奔流！！！」

そして後ろでポカーンとしているエクレールをよそに津波が治まつたその場には倒れ伏すレオン・ミシェリ姫と無傷の勇者 桜花が立つていた。

桜花「（ま、体力チートな俺に紋章術なんて使わせたら、半永久的に使い続けられるもんね！）」

司会『ななななななんと！あのレオ閣下の獅子王炎陣大爆破が！勇者の紋章術の大津波にかき消されたあああ！！？しかも当のレオ閣下も倒れ伏している！！！あの勇者、レオ閣下をあつさり倒してしまったああああ！！！』

当然、この結果に大勢の人々が驚愕し大騒ぎしている。

エクレ「おい勇者！なんだ今のは！？しかも閣下と一緒に周りの奴ら全員猫玉になっちゃってるじゃないか！！」

「 桜花「見たかエクレ！勝つたぞ！－さて早く城落としに行こうぜ！」

エクレ「無視するな！ちゃんと答える！」「

「はははははははははは！」

その後、勢いに乗ったビスコッティ軍は久しぶりに勝利した。

～お風呂での出来事、そして姫様誘拐、だが防がれる～

桜花「おふる、おふる、おつふつる~」

かぽーん・・・

桜花「広いなおいー・テンションあがるぜー!」

ミルヒ「えつー!? 勇者様!..?」

桜花「おっす姫さん! なんだ姫さん入つてたのかー! ん~なら一緒に入るうわうじよつ!~」

ミルヒ「ふええ?..えええええー!..?い、いえ! 私はも、もう出ますからー!..で、では!」ゅうくつ!~」タタタ・・

桜花「行つちやつた・・ま、いつか

ちなみに言つとくけど、この桜花君は高校生くらいの年齢だからね? ミルヒの肉体年齢は15歳くらいだから、桜花君は別に欲情とかはしません。なぜならこの600年で開き直つちやつたから~!!

” キヤアアー!..!..”

桜花「ん? そういうえば姫さん誘拐されんだつけ・・・はあ、行きま
すか仕方ない。風呂の時間を邪魔した罪は重いぞ・・・」

この桜花君は大のお風呂好きなのですよ!~

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

外

「桜花」……お~い、姫さん無事か~?」

「われら、ガレット獅子団領!」

「ガウ様直属秘密諜報部隊!」

「――ジエノワーズ! ! ! 」

なんか、馬鹿そうな三人組が現れた。そして真ん中の娘から次々話しだす。

「勇者さま。あなたたちの大変な姫様は我々が攫わせていただきます」

「ひづらは!! オン砦で待ってるからなあ

「姫様がコンサートで歌われる時間まであと一刻半。無事助けにこられますか?」

「つまり大陸協定に基づいて用心誘拐奪還作戦を開始させていただきたいくらいです。こちらの兵力は200。ガウル様直下の精銳部隊」

「で、ガウル様は勇者様との一騎打ちを」所望です」

「勇者様が断つたら姫様がどうなるか」

桜花「つまり、姫さん返して欲しけりやそつちの悪ガキと鬭り合ふつてこと?」

「そうです。どうしますか?」

「?」

桜花「ん~・・んじゃあれだとりあえずその姫さんちょっと貸して?」

「あ、はいどうぞ~」

桜花「ありがと」

桜花のせりげない頼みで抱えられていたミルヒが桜花に渡される。

桜花「んじゅ、またね~。あとやりたきゅいつでも相手してやつから、そつちの悪ガキにひいてお向けと云ふとして」

「ああ!~?姫様とられてる!~?」

「うかつだしたね・・なんて巧妙な・・

「むむむ・・一回戻さましようか・・

と三人は去る、が

桜花「だが、逃がすとでも思っているのか馬鹿娘共」

田の前には勇者桜花が怒りの笑顔を浮かべて立っていた。

「あ、 、 あ・・あああ・・」

三人はその笑顔におびえている。

「只今、お仕置き中（バキイ！！ヤメテエ！！オラアア！！ズガガ
ガガガガ！！ナンデソンナモンショウジユツツカエルノ！！？ギャ
アアアアアアアア！！！」

桜花「ふう・・ああ、すつきりした」

ちなみにこの光景は放送中である。

三人娘 ちーん・・・

真っ白な三人も、すつきりした笑顔の勇者もばつちり放送済みである。

ガウル・・・なあ、『ジグワイ』・俺、勇者に手を出すやめとく。
・・

『ジグワイ』「それが、いいでしょう・・・」

この時ガレット、レスコットイ問わず皆が思った。

「…………（この勇者を怒らすのはせつこうたいにやめて
ね）」

とね

その後、何日たつてもこないガウルを待ちかねて桜花君が直接乗り込んではいったのは別の話

～後日談、レオ閣下。星詠みの変化～

レオ「あれー?なんか今までと違つてはつきり見えるの?・ええ
!?

そこに見えたのは、いつも見ていたミルヒの死ではなく、原因である魔物をフルボッコにしている桜花だった。

後ろでは自分とミルヒがポカーンとしている。

レオ「どうまで化け物じみておるんじゃあの悪者は・・・」

だがレオ閣下の表情はとても柔らかで憑きものが落ちたような顔をしていたといつ。

番外編 桜花君がDOGDEYESに勇者として召喚！（後書き）

この平和な世界に桜花君なんてチート入れたら、バランスが崩れますね。

多分、番外編でくらいしか書かないんじゃないかな！

桜花君のKYOUフルボッコ（前書き）

やつとい、桜花君がまともに戦える・・かな？

桜花君のK-Yフルボッコ

はいどうも！桜花君です。前回、フェイトとお風呂に入つたり一緒に布団で寝たりと結構良い感じに幸福な日にあつてきました！！フェイトの髪はとてもいい匂いがして抱き心地もそこいらの抱き枕と比べ物にならないくらい良かつたです。

はははー！ フェイト好きの読者！ ざま 見ろー！ ちょ・・・！ 痛い！

! !

•

ま、まあそんなわけで一晩泊まり、今日！遂に管理局が介入してきます。とりあえず当面の目的はＫＹ行動する奴になつてもうつことにします。

そんなわけで今は学校に来ています。アルフには放課後に動いてもらいうよう言つといたんでね。学校は行かないと！

桜花「先生！この時間、懸賞ハガキを書きたいんですけど良いです

先生「駄田に決まつてゐるぢょひ？ 懸賞なんて当たるわけないんだから・・・」

桜花「先生！…そつやつて諦めるのはよくなないと私は思います…！人間、愛があれば必ず通じるんですよ…!!」ならばハガキだつて愛を込めて書けばちやんと通じるでしょう…！」

アリサ「良いからアンタは黙つて授業を聞きなさい…」ぱし…！

桜花「ふべつ…！」んつ…！

アリサの一撃で俺は机に頭からダイブした。そのまま失神したフリをしてハガキを書く。

なのは「・・・」じー

なのはと皿が合つた。

桜花「なのは…」手をかすんだ！黙つてればやり過いせぬ…！」

俺はなのはに小さな声で叫ぶように頼む。

なのは「…わかつた、いいよ」

桜花「ホントか！ありがとう…」

さて、ハガキの続きを「せんせー、桜花君が寝たふりしてハガキ描いてます…」なのはああああああああ…！！

桜花「なぜだ！なぜ裏切ったなのはあ…！」

なのは「手は貸すつて言つたけど、口は貸した覚えはないの」

「ぬ、ぬかつたわああああああああああああ！」

先生「あの・・授業進めていい? (泣)」

そこで、まあいろいろやって放課後！時間が飛んだ？知らんがなーーーで、なんかなのは達がごちゃごちゃ騒いでます。

なのは「・・・・」

アリサ「なのは！なにか悩んでるんだつたりいいなさいよー！友達
でしょうーー？」

なのは「うめんね・・アリサちゃん・・」

アリサ「つ・・・・! もういい! 行くわよ! すずかー!」

すずか「アリササヒサん!…えと…」めんねなのまけせん!じせ
ね・・・・・

そういうのはのもとからアリサとすずかが帰つて行く。なのはは温泉の時や暴走の時に何もできなかつたことで悩んでいるようだが、実際そんなことを相談できるわけも無い。

桜花「なのは！帰るぞい！」

なのは「あ、桜花君・・うん、わかつた・・」

1

帰り道

「…なのは?…どしたん?」

「…桜花君…私どうしたらいいのかな…?桜花君が私を見つけた時の温泉旅館の時も、暴走の時も…私何も出来なかつた…アリサちゃんにも心配かけて…」

「…」

「…え?…これシリアスな場面?…なんで俺がこんな相談受けてんの?…はあ…まあいいよやつてやるよ…」

「…桜花君…アリサの件はちゃんと謝つとけ。人に言えないような悩みくらいある。そんなことは向こうだつて分かってる、だからちゃんと謝つて自分で解決するから心配するなつて伝える。んで…魔法の件だが…お前は何もできないわけじゃない。でもな魔法をしつて数日のお前がなんでもかんでも出来たらおかしいんだよ。だからお前はお前が今できる事をしろ。」

「…なのは「今…出来る事…?」

「…桜花君…フェイトと話がしたいんだる?」

「…なのは「…うん…うん!分かつた!!私頑張るよ!明日アリサ

ちゃんとちやんと謝つてみる！ありがとう…桜花君…」

桜花「おー・・・ガンバッテー・・・」

シリアルとかマジ勘弁・・超めんどくさいし。

で、現在はフェイトとなのはがジュエルシードを探し当てたところ。

なのはヒュイトが木の化け物に対峙します。

フェイエ「プラズマランサー!! ファイア!!」

なのは「デイバイン！バスター！！！」

すがあああああああああああああああああああああん！――――――――

未来の魔王と死神がもう攻撃を仕掛けている。しかし

アルフ「！？あいつ生意氣にシールドを張つてゐる！！」

ユーノ「なのは！！」

獣組は鎖のバインドで動きを止めてるけど・・・
さて、そろそろ介入しますか！

桜花「でええい！――！」

俺は純粋な蹴りでシールドを壊した。あれ？すつごに脆いなこのシ
ールド。

（それは貴方が規格外なだけです b y 作者）

なのは「ええええええええ！――？ 桜花君？ なんでえ――？」

フェイト「凄い・・・」

ちなみに俺バリアジャケット着てません。なぜならお面の時に着て
たから！ フェイト達にはばれたくないんだよね～・・・あ、ユーノと
アルフは知ってるよ？ 俺が教えた。

桜花「さて、やりますか！」

なのは視点

今日は、桜花君にも励ましてもらつてジュエルシード探しにも気合
がはいつてます。

絶対にあの子に話を聞いてもらつの――・・・？ なんで桜花君あの子
の名前知つてたんだろう？・・・まあいいよね・・・

ユーノ「なのは！！」

なのは「あつ・・・あの子・・それになにあの大きな木！？」

そこにはあの綺麗な髪の子とジューエルシードの発動した木が戦っていた。

なのは「あの！」

アルフ「！？ フュイトの邪魔するな！ 怪我したくなかったら引っ込んでな！」

ユーノ「今は言に争つてる場合じゃない！ とにかく今は封印を！！」

そうじつて封印しようと闘つてるんだけど……

なのは「全然、攻撃が通らない！」

フュイト「固い・・・！」

あの子と私の攻撃は全部シールドに防がれてしまい通らない。すると、どこからかある男の子が木に近づいて。危ない！ …と思つたら

桜花「でええい！ …！」 ザガアア！ ！

その子は蹴りで木のシールドを壊しちゃった！ でたらめなの！ …！ いうか桜花君だし！ …！

そしてそのまま櫻花君は走り出して木の根や顔、枝をどこから持つてきたのか木刀で切り裂いていく。

フライト「凄い・・・」

となりでの子も田を見開いてびっくりしてゐる。あー今チャンスじやない?

なのは「あの！・・・貴方のお名前・・・聞かせてくれない？」

フェイド「あ・・私は・・・フェイド・・フェイド・テスターッサ・

なのは「わたしは・・なのは! 高町なのはだよ!」

גַּת־הַנְּצָרָה

そしてフロイトちゃんにまた話しかけようとしたら・・・

「封印！」

フロイトー!?

なのは一あ、うん！分かったの！」

桜花君が木の化け物を倒して呼びかけてきた。そして同時に動き出してフエイトちゃんと一緒に封印した。

桜花「ふう・・やつと終わったか・・・ん?」

イカロス『どうしましたか?』

桜花「ああ、イカロスか・・『めんな使ってやれなくて。』

イカロス『いえ、気にしないでくださいマスター。それでどうしました?』

桜花「いやあいつらジユホールシードはさんで何してんのかな~って。」

・

イカロス『原作は見たでしょ~! 戦うんですよ。』

桜花「やつぱ? はあ~・・暴走するだまた・・」

イカロス『でも・・KYOUが来ますよ? 管理局の方も転送装置を起動させましたし。』

桜花「うそ、なんでわかんの!~!」

イカロス『私を作ったのはマスターですよ? 管理局のデータベースなんて1秒あればいくらでものつとつてやれますよ?』

桜花「お前も対外バグだよな」

イカロス『あ、マスター。一人がぶつかります。それと転送、来ます!』

桜花「んじゃ行こうか!!」

桜花が飛び立つ。

三者視点

桜花がそんな感じの時、フェイトとなのはが会話をしていた。

フェイト「ジュエルシードには・・衝撃を『えたらダメみたい・・

なのは「うん・・そうなつたらレイジングハートもバルディッシュも可哀そうだもんね・・

「フェイト」でも・・譲れないから・・

フェイトがそう言つて構える。

なのは「わたしはお話したいだけなんだけどな・・

そつ言つてなのはもまた構えた。

ジュエルシードを賭けて両者が駆けだしたその時

クロノ「二人とも武器を納めろ！」この戦闘は危険だ！！

と割り込む黒い影。

二人は、それに気付き急停止をかける。だが

桜花「死ね！－」のＫＹがああああああああああああああああああ

すつぱああああああああああああああああああああああああああ

クロノ「！」はああああ！－！－？」

と桜花がクロノをこれまでビンから出したのか白いハリセンで思いつきりはたき落した。

二人は困惑する。

なのは「え・・えつと・・？」

フュイト「・・？」

だがかまわざ桜花は喋りだす。

桜花「アホかお前は！－空氣読めよ！－今のはぶつかるところだつたじやん！－わっかんないかなア！－ええ！？だからＫＹとか変態とかシスコンとか言われんだぞボケが！－」

クロノ「なつ・・・なんなんだ！君は！－邪魔をするな！－」

桜花「知るか！邪魔も何もねえよ！邪魔したのはむしろそつちだらうが！！！」

クロノ「くつ・・・」これは公務執行妨害だ！よつて君を逮捕する……

桜花「やれるもんならやつてみろや・・くされくゞ

クロノ「この！！！」ドドドドー

クロノは魔力弾を桜花に向けてはなった。一般人の桜花に向けてである。

桜花はそれをあえて受ける。

ずがああああああああああああん！――――――――

なのは「桜花君！――？」

フェイト「桜花つ！――？」

二人とも、直撃した桜花を心配する。

しかし煙が晴れて出てきたのは

桜花「全然、聞かねえなア！蚊が止まつたみたいだぜ！――」

――無傷の桜花であつた。

そこから桜花の一方的な過剰防衛が始まる。

ワンサイドゲーム

桜花君のＫＹフルボッコ（後書き）

フルボッコにはならなかつたですね・・・！

でも次の頭からはちゃんとそうなつてます。
では次会いましょう！

どうも、桜花君だよ！前回はこの小説サイトでもKYと知られる管理局の執務官、クロノ・ハラオウン君14歳にハリセンを叩きつけたんだ！で、今はね？なんと・・・

「死ね死ね死ね死ねええええええええ！」

クロノ「ふざばざあばつばいじこおれいじかわおくせう
「だ342くら34?ーーーーー?」

クロノに集中魔力弾連打を～～～～打つべし打つべシイイイ！――

なのは -あの・・・桜花くん・・・やはり過ぎなの・・・」

フユイト 桜花・・そろそろやめてあげた方が・・

なのはとフエイトの二人は若干あわてながら、かわいそうになつてきて桜花をなだめる。

「・・・そうか、んじゃ・・やめるか」

クロノ「チーン

その甲斐あつて桜花は活動を止める。

フェイド」・・・死んでないよね?」

桜花「ん~? 知らない なら確かめてみよう。」

なのは「確かめる・・・?」

ユーノ「どうやつて?」

アルフ「そんなの普通に起こせばいいじゃないか」

桜花「そーそー、普通に起こせばいいんだよ」

桜花はクロノに近づいて その腹を思いつきり踏みつけた。

クロノ「ぐふうおあー!」

クロノが飛び起きた。

なのは「桜花君・・・酷過ぎなの・・・」

フェイド「そこは普通に起こしつよ・・・」

桜花「んじゅ、イカロス通信妨害と音声妨害解除」

イカロス『 a11 - longt 全妨害結界解除。』

ブウン!

そんな音がしたと思ったら。

――ノ――ロノ――クロノ――！――『

と通信が入る。

そう、皆おなじみリンクティ提督だよ！

クロノ「げほっ。・・げほげほ！――か、母さん――あ、いや提督。

』

リンクティ『クロノ！大丈夫なの！？クロノ！――』

桜花「なんであんなに必死なの人・・？」

イカロス『まあ、通信と音声は妨害してましたが、映像は伝わってましたからねえ・・母親としては息子が死にそぞになる映像はきっとあるものでしょ。』

桜花「あ、そういう口調でちやんと非殺傷にしてたよ。俺はそこんところ抜け出ないからね！――」

イカロス『でも、あの4938821発中1-2発は殺傷モードでした』

』

桜花「そう？でも生きてんじゃん？いいしょ？」

リンクティ『良いわけないじゃない！――』

桜花「うおっ！――誰？」

なのは「桜花君、話し聞かないと駄目だよ？」

おや・・フロイトは逃げたみたいだねえ・・それにはなほ何かし
ら説明を受けたようだね・・

桜花「ふうん・・とりあえずあれだら、管理局に連れて来いみたい
なものだろ?」

なのは「え、なんで!?よくわかつたね・・」

リンディ『・・まあ、いいじわ治療も戦闘中にしていたよ!だし・・
それで来てくれるかしら?』

桜花「え〜・・だが断るー」

なのは「え・・一緒に行こうよー・・」「うるさい

なのはがうるさいした涙目で俺を見ている・・しかも上目遣こと來
た。

ま、最初から行くつもりだったんだけどね

桜花「ん?いいよ」

なのは「やせった一緒にのー

で、管理局内に転送された俺こと桜花君です。

桜花「来たよ！んじゃあそぼあそぼ」

クロノ「ああ、それじゃ公園にでもーーって違う…」

桜花「クロノ君的には公園がブームなんだねー意外と可愛いくことこのあるじゃないか」

読者達よクロノ君は公園が好きみたいだよーーー！

クロノ「ちがつ…なんだ君達ーーその温かな眼はー母さんまでそんな眼で見ないでくださいーー！」

リンディイ「クロノ…こんど遊園地にでも行きましょーな・・・」

なのは「クロノ君・・・」

ユーノ「クロノ・・・」

あ、ちなみにユーノくんはもう人間の姿に戻ったよーーその際女性陣から淫獣として冷やかな目線で見られたけどね
とりあえずクロノ君と同じ日に会つてもらつたよー

リンティ「それで・・本題に入りましょうか。まさなぜ貴方達は口ストロギア、ジュエルシードを集めていたのかしら?」

そんなこんなでリンティさんが本題に入る。

なのは「あの・・口ストロギアってなんですか?」

ユーノ「過去に何らかの要因で消失した世界、または滅んだ古代文明で造られた遺産の総称だよ。ジュエルシードもその一つなんだ。」

とユーノが口ストロギアについてなのはに説明する。

なのは「へへ・・・」

とそういうった後、ユーノが自分の出身世界とジュエルシードへの関係、なのはとの出会いやその経緯を話す。

ユーノ「・・・それで、僕が回収しようとした・・・」

リンティ「そう。立派だわ」

クロノ「だが無謀である。」

ユーノ「うう・・・」

「旦、リンディのほめ言葉で喜ぶユーノだったがクロノの言葉でまた落ち込むユーノ

桜花「ははは、回収の遅れた管理局がなにをいつてるのや」

クロノ「うぐつ・・た、確かにそりだが・・」

リンディ「それはすまないと思つてているわ・・それで、ジュエルシード回収に関しては管理局が全権を持ちますー」

ユーノ「えー!？」

なのは「え・・・!？」

桜花「ふん・・よし、帰ろうのは、ユーノ。管理局がなんか全部やつてくれるんだって! 行こー」

そして、その言葉を聞きなのはとユーノが驚くが桜花は二人の手を取り転送装置のもとへと歩いていく。

なのは「お、桜花君ー!？」

ユーノ「ま、待ってくれーあればぼくも回収を手伝いたいんだ・・」

「...」

桜花「黙れ・・良いから早く着いてこい・・・こんなクソの集まりに手を貸すことはない、今まで通りやる。」ぼそつ

そう桜花にささやかれ、ユーノとなのはは困惑するが手は掴まれて

るためビニール引つ張られていく。

「まあ、待つて。」

トモリでコンティナード呼びとめられた。

「……なんかい？そつちが全部やつてくれるんでしょ？」

「リンディー「つ・・そうだけど、急に言われても心の整理がつかない
でしょう? また明日ここにきて話しましょう?」

櫻花

と桜花の口調が某過負荷調になり、リンディの体に数本の大きな螺子が捻子込まれる。

リンクトイ「がつ・・せつ・・・」
チャウチャウ・・

リンディは壁に呂あつせられ、引かずぬよひに座り込む。

『あはっ、会話中なら攻撃されないとthought?』

『自分の陣地なら攻撃されな

いと思つた?』

『僕がまだ子供だから油断してた?』

ノの気持ちを考えて丸め』めると思つた?』

『なのはやユー

『あめえよ』

桜花は突き刺さる螺子を引き抜く。

なのは「?」

なのはには認識阻害魔法でこの光景が見えていない。普通の光景に
見えている。

ユーノ「なつ・・・・! ? 桜花・・・・?」

クロノ「母さん! 母さん! ...」

クロノがリングディに呼び掛ける。

がそんなのに構わず桜花は全ての螺子を引き抜いた。

桜花『が』『その甘ひ、嫌いじゃないぜ』

と次の瞬間リングディの怪我や周りの血が無かつたことのように消え

失せる。

リンディ「な・・なにが・・?」

桜花「正直に言つたうじつです？手伝つてくれと。自分の有利な状況を作ろうとするな。いいか俺達が手伝つてやるんだ、はき違えんな・・・」

「うーん、どうも、お世話になりました。」
「うーん、どうも、お世話になりました。」

なのはの認識阻害を消す、だが今のお願いは聞こえていた。

「……」「……………」

ユーノとクロノは今の光景が信じられず俺を睨んでいる。・・・まあ、どこ吹く風なわけだが

「いいよ 手伝つたげる。じゃあ、また明日集合でいいかな?」

クロノ「・・・はあ・・・分かつた明日はぼくが迎えに行くさつきの公園に来てくれ。」

なのは「はい！」

ユーノ「はい！（桜花？あとで話を聞かせてもいいつよ？）」

桜花「（ん？うんいによまたあとでね。）」

リンディ「では決まりですね。クロノ、転送装置の準備を

クロノ「はい、じゃあこっちの此処に乗つてくれ

三人で指示に従いそこに乗り込む。そこで俺は振り返り。

桜花『じゃあ、また明日とか』

転送された。

桜花「んじゃ、さつきの事について話そうか？ ゴーノ？」

ゴーノ「桜花・・・・君は一体・・・」

一体、なんだ？

その言葉に桜花は不敵に笑う・・・

桜花君のK-Yフルボッコ 2(後書き)

あれ?なんか変な雰囲気になつたぞ?

次回にはこの雰囲気を元に戻すぞ!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6384z/>

世界を周るは転生者(チート) in リリカルなのは
2011年12月31日23時48分発行